

---

# 一ターン目のアートマ

紅藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一ターン目のアートマ

### 【Zコード】

Z2361Y

### 【作者名】

紅藍

### 【あらすじ】

近未来 記憶と人格を保ったまま転生を繰り返す人々・アートマの出現によって、あらゆる社会制度は変化を迫られつつあった。前世と全く同じ容姿で転生を繰り返す特殊なアートマ＝「再生者」である少女・ライムは、賞金稼ぎの師である猫・カグマと共に、アートマ犯罪者達を収容する刑務所都市へと帰還する。そこで彼女達を待ち受ける事件、その裏では、一つの計画が進行していた。

電撃小説大賞三次選考落選作です。辛口批評など歓迎いたし

ます。

## プロローグ

男は逃げていた。

真夜中のストリート・モール。人の気配は皆無で、月すらも雲に隠れて顔をみせない。街灯も「ごく」くまばらにしかなかつた。通りの中央を疾走する男の視界の左右を流れしていくのは、長い間開けられた形跡のないシャッター や、ひび割れたままのショーウィンドウばかりだ。通り一帯が、本来の役割である商業機能を真つ当たり果たせなくなつて久しい。

男は視線を上げた。

やや遠くで、傾いた看板が壁面へとしがみついている。鋆びた金属板の上では、歯抜けになつたネオンサインが明滅していた。

自らの存在意義がとうに失われたのにも気づかず、それでも健気に役目を果たそうとしているのだ。まるで、戦争終結を知らずに壕の中で潜伏し続ける兵士のように。

一度、壊してしまえばいい。

お馴染みの思考が男の胸にうかんだ。

寂れたストリートがいつまでも立ち直れないのは、一度でも完璧に死んだことがないからだ。死にかけてはいるが、しかし死にかけのまま存在している商店の群れ。破滅にまでは至っていない。いつまでもこの世から離れられず、ゾンビのような醜態を晒し続けていられるのだ。

だから再生しない。

破壊がなければ、再生はありえない。

それが男の哲学だつた。

事実、男は今までずっとその哲学に従つて生きてきた。汚れたもの、うまくいかなかつたもの、欠陥があるもの、それら全てを壊してきた。

趣味で描いた出来の悪い水彩画や、醜いわりに化粧ばかり濃い姉、購入したもののいまいち部屋とマッチしない家具や、酒と注射器に溺れて喧嘩ばかりの両親、そして時に、自分自身の人生さえも。

壊してしまえばいい。

一度壊しさえすれば、新しい次が訪れる。

ばらばらにした過去は無かつたことになり、全てはリセットされる。

そんな思考をうかべ、足下への注意が疎かになつた瞬間、男の左足へと何かが絡みついた。

反応が遅れ、男は無様にも地を転がる。混乱しつつもなんとか受け身を取り、左足を確認した。

視界の中央にあるのは、銀色の輝き。

後方に広がる暗闇から伸びてきた一本の細いロープが、男の左足首へと噛みついていた。

「捕まえた」

ゆづくづ迫る足音と共に、未だ闇を纏つたままの追跡者が声をあげた。

落ち着いた女の声。冷たく静かな響きは、冬の夜に似ていた。呼吸の乱れもない穏やかさだった。

対する自分の口からぜえぜえと白い息が立ち上っていることに、男は気づいた。

「だれだあ、お前？」

なかなか外れないロープを握りしめながら男は叫んだ。溢れ出でくる恐怖を、少しでもおしこめようとして。

ありえない。自分が追いつかれるなんてありえない。自分は特別な人間、神に選ばれた人間なのだ。普通の相手なら、たとえバイクが追つ手でも撒けるというのに。

「犯罪者に名乗る名前はない。知られると面倒だし」

相変わらず淡々とした調子の声で、追跡者が街灯のわずかな光へと頭部を晒した。

現れたのは 一人の女、いや、十六歳前後の少女だった。

薄暗がりの中でもわかるほど鮮やかな赤毛の下で、エメラルドの双眸が凛とした輝きを放っている。それは冷たい輝きではあるが、一方で強烈な意志も感じさせた。形のよい唇が、発音のために最適化された形でもって、続く言葉を紡いでいく。

「ああ、そっちも名乗らなくていいよ。もう知ってるから。現タンにおける戸籍名、ロバート＝スミス。ロバートとしての罪状だけなら……ここ一ヶ月で起きた五件の連續強姦殺人、その容疑者として田下指名手配中。何か訂正は？」

少女がさらに近づき、身体全体が姿を現す。

異様な出で立ちだつた。

上はオフショルダーのカットソー、下はシンプルなホットパンツ。ここまではいい。

奇異なのは、上半身へとめちゃくちゃに巻き付けられた銀色のロープだ。まるで少女自身が捕らわれた獲物であるかのように、がんじがらめとなつていて。そしてそのロープこそが、少女の左手を絆由し、今、男の左足首へと喰らいついているものだった。

「訂正なんぞねえよ。する必要がねえからなあ！」

男は咆哮をあげた。ロープをつかんで思い切り振り回す。つながっている少女の身体は軽々と吹き飛び、振り子のように弧を描いて、商店のショーウィンドウへと叩きつけられた。ガラスが粉碎され、少女はそのまま店の中へと放り込まれる。

「思い知らせてやるぞ！ なめやがつて、女一人だと？ 雌豚一匹で、俺をなんとかできると思つてやがるのか？」

男はロープを引っ張りつつ拳銃を取り出した。トリガーが躊躇なく引かれ、ストリートへと銃声がこだまする。割れたウィンドウの奥に広がる闇が、次々と銃弾を吸いこんでいった。

標的へと確かに着弾している衝撃が、ぴんと張ったロープを通じて男の腕へと伝わってくる。

そのてごたえ 肉厚のステーキへと犬歯を突き立てるのに似た感覚が、男の精神を高揚させ、トリガーを何度も何度も引き絞らせた。

そうだ、今の自分には力がある。

病弱虚弱だつたかつての自分は遙か昔に死んだ。死んで、生まれ

変わったのだ。もつ、ひょろい身体を遊び半分でサンダバッグにされはしないし、屈辱的な格好をさせられてクスクスと笑われもしない。

なめた女ども、いや雌どもに、身と尻の振り方を叩きこんでやれるのだ。

「カハツ……ハハハ、アツ、ギャハ、アツハハ」

銃弾を撃ちつくし、辺りに硝煙が満ちる中、男は両腕をだらんと下げた。さっきまでの憤怒とは一転、恍惚とした表情で喘ぐ。自然と鼻歌を口ずさんでしまっていた。

お料理お料理楽しいな。

銃を使つてドン・ドン・ドン。はい、一丁あがり。

売女の流血ソース、弾丸ソテー添え。

冷めちまわないうちにいただくとしよう。

薄明かりの下で見た少女の容姿を思い出し、男は歯をむき出して笑った。

かなりの上玉だった。年相応といった細身の身体は肉感が少し物足りないかもしぬないが、たまにはそちらの趣向もいいだろう。できれば活き造りがベストであるのは確かなのだが、今回ばかりは仕方ない。

流れる涎を拭いながら、男が一步踏み出した時だった。

未だつながったままのロープが、向こう側から強く引っ張られたのは。

「 どうやらビンゴだったみたいだ」

不意をつかれてバランスを崩す男の耳に、たつた今蜂の巣にしてやつたはずの少女の声が聞こえた。

銃の発射音も。

間断なく放たれた三発の銃弾。苦しい姿勢ながらも、男は懐から出したナイフで全てを叩き落とした。ひしゃげた弾丸が足下に転がり、鈍色に光る。

「 その怪力と反応、やっぱりアートマくだね」

のそり、と闇から出てきたそれを目の当たりにし、男の両眼が限界まで見開かれた。動悸が速まり、足が勝手に一步下がる。  
とびきり悪趣味な夢でもみていいのではないか、そうであつてくれと願つた。だがそれは現実だった。幻想だったのは 男が今まで振りかざしてきた『誇り』の方だった。

「 お、俺は……選ばれた人間のはずだ」

アートマ 記憶と人格を維持したまま、何度でも転生できる人間。世間では幽霊やUFOと同じカテゴリーに属し、都市伝説やオカルトの中には住めないとされている存在。

男は、そういつた伝説の実在だった。本や写真から飛び出したファンタジーだった。

「 選ばれた存在、か。あなたみたいな人間は、皆が似たセリフを吐

く

もちろん、自分と似た者がこの世のどこかにいるかもしれない、と考えたことがなかつたわけではない。それでも、男は少女の姿を見て絶句したのだ。おどき話の住人は、その世界以上のファンタジーを夢想したりなどしないから。

「お前……なんなんだ？ 警察じゃ、ない」

呆然と呟く男の前にあるのは、未知の存在、未知の光景。B級ホラーのような映像。

ガラス片と銃創にまみれた少女が、こちらへゅうくくりと歩いてくる。

血が流れ出している傷口は、蠢く口のよじこむひくひくと痙攣している。

黒い硝煙に似た氣体を噴出させつつ、傷口は面積を縮めていく、やがて塞がった。

肉体に押し出されたガラス片が落ち、澄んだ音をたてて砕けた。同じように傷口から吐き出された灼熱の弾丸が、血だまりでジュツと音を鳴らした。

自己再生能力 それも、ひどく強力な。

男にとつての常識を超えたファンタジーが、今、華奢な右腕を上げて拳銃を突きつけてきていた。

「そう、警察じゃない。あなたの罪は、もう警察じゃ裁けない。今までそつだつたらう？ ロバート……いや、ケネス＝レーン」

意図的に強調された人名に、男の心臓が大きく脈打つた。噴き出した脂汗が、夜の空気をより一層冷たく感じさせる。

「どうからその名前を……？」

ケネス＝レーン。

男がこの世に初めて生まれてきた時、くそったれの両親からつけられた名前。とうの昔、前世の前世のそれまた前世に捨てたはずの、呪われた記号だった。

男の反応を見た少女は微笑んだ。硝煙のよく似合つ笑み。

「実は確定じゃなかつたんだけど、当たりだつたようだ。犯行手順や被害者の特徴なんかから予測して、カマかけただけ。単純な奴は特定しやすいな。『馬鹿は死んでも直らない』っていうのは、文字通り、本当だつたみたいだね」

「！　このアマツ」

少女へ向かつて男は突進した。向けられている銃口など氣にもしない。

「怒つた？　怒つたのか？　ケネス？」

嘲りと弾丸が男へと飛来してきた。弾丸ははじき飛ばせたが、少女の言葉は男の心へと深くしごこんだ。

「その名で俺を呼ぶな！」

怒号を放ち、右手のナイフを突き出した。刃の先端が少女の喉元に届く直前、その動きはピタリととまる。

いつの間にか周囲に展開されていたロープが、男の右腕を拘束していた。

「何度も呼んでやるぞ、ケネス」

少女の銃撃が連續で響く。ロープの呪縛を力ずくで振りほどき、男は距離をとつて銃弾をかわした。

かわしたのだと思つていた。

ぱりんと音がなり、それが思い違いだつたと気づいた。

まばらにしかなかつた街灯　　貴重な光源が全て割られていた。  
月明かりすらない暗闇が辺りに満ちる。

「糞！　小賢しい」

吐き捨てながら男は瞳へと神経を集中した。  
すかさず虹彩を操作　　網膜に入れる光量を調整。  
視界を取り戻すまでに一秒とかからなかつたはずだが、その間に  
少女の姿は忽然と消えていた。

「どこだ？」

ぎらついた眼で男は周囲を見渡す。

右か、左か。

それとも後ろか？

「　上だよ」

少女の足裏が男の頭頂をとらえた。続けざまに両肩が撃ち抜かれ  
る。両腕は一切の命令を受け付けなくなり、代わりに痛みというア

「ストリートを鳴らし始めた。

「つー まだだ、まだ……」

「いや。もうおしまいわ」

少女が左手を動かすと、男の両足にロープが絡みついた。男はなす術なく仰向けに倒れる。視界が上方へと強制的に向けられ、人の意志とは無関係に、喉がひきつった叫びを発した。

「ひつ ！」

男へ向け、一直線に落ちてくるものがあった。

ロープに絡め取られた、ネオンつきの看板。ストリートの壁にしがみついていたのを力強くではがし取られた、やや分厚い鋼鉄製のギロチン。

酒場か何かのものだったのか、看板にはこう書いてあった。『アーリス・イン・チェインズ』と。

絶叫が、あがつた。

垂直に落ちた看板が、男の両膝を切断しつつ地面へと突き刺さっていた。

断面から勢いよく血液が噴出し、血だまりを広げていく。太ももの裏、尻、そして背中へと、順に血で濡れていく感覚が男の精神を追い詰めた。

泣き叫ぶ声は赤子のようだった。痛覚は咄嗟に遮断していたが、両足を失つたという喪失感だけはどうしようもない。

「お前……よくもこんな……よくも、よくも…」

「なに、後でつなげてもらえるさ。それ」「……あなたのやつてきたことには比べれば、たいしたことないだろ?」

傷口がロープで縛りあげられ、出血の勢いが無理矢理弱められる。男が失血死しないための処置なのだろうが、間違いなく、少女の慈悲から生まれた行動ではなかつた。

むしろ逆だつた。

両手足の自由を失つた男を冷たく見下ろし、少女は告げる。

「手配者リスト登録名・ケネス＝レーン。一ターン目、当時の両親と姉を一晩で射殺。逮捕後は留置所内で首を吊つて自殺。生まれ変わつた二ターン目、無差別に女性九人を強姦して絞殺。十人目にのしかかつていたところを現行犯で逮捕。そしてまた留置所内で自殺。三ターン目」「

少女が罪状を述べ立てていってくれ、男の心から怒りの感情が消えていった。

「な、なんのことだ……？俺には、や、やつぱり」

卑屈に笑つて男は答えた。

吐き気がしていた。

これでは、忌々しいあの頃と同じだったからだ。酔つた勢いで平手を振り上げる母や姉の前で、あるいは大勢の同級生に囲まれる中で、情けなく震え、逃げることもできず、ただ嵐が過ぎ去るのを待つしかできなかつたあの頃と。

「捕まつては自ら命を絶ち、生まれ変わることで……あなたは、法の拘束から逃れ続けてきた。けどそれも今日でおしまい。もうあなたは死ねない。わたしが殺さないからね。もつ、逃げられはしないよ」

「馬鹿な。どうしてわかる？ 僕の過去……。ありえない、こんなことは……。ありえない、ありえない」

自分が手に入れたのは、人生をリセットできる権利じゃなかつたのか？

男は恐れた。

過去が蘇つてくることを恐れた。

打ち壊し、ぶち殺し、土の下へ埋め、後ろ足で砂をかけ、睡を吐きかけてやつた過去。

いつでもポイと捨て、容易に葬り去れると思つていた数々の罪が、墓の下からはい出し、自分を引きずりつゝもつとしている！

汗まみれになつた男の額へと、小さな謎の機械があてられた。ピツという音が鳴り、少女が頷く。

「精神紋一致、簡易認証だけど充分な物的証拠だ。アリアンソロッドから委託された捜査員権限により、あなたを拘束する」

少女の機械音声のような宣告と共に、男の口へと拘束具がはめられる。

男は、全てが終わつてしまつたことを悟つた。

いや、全てが終わりなきものになつてしまつたことを、悟つた。

両足からの出血によつて、靈んでいく意識。

「」のままじうにかして失血死できないだらうか、と一瞬だけうかんだ希望も、少女の瞳につかぶ眼光の前には、あまりにも儂い。

意識を失う直前、少女の呟きが男の耳へ届いた。

「そう簡単に……やり直しなんかできやしないぞ」

その声の、物憂げで悲しげな響きに送られて。

男は闇に落ちていった。

地獄へと至る前に許された最後の慈悲、ひとときの安息へと。

「うぬさいなあ……。バスの中なんだから静かにしてなよ」

膝上でわめく子猫から目線を逸らし、ライムはこめかみをおさえた。

猫のわめきといつても、ニヤアニヤアとかキヤンキヤンといつた愛らしいものでは全くない。

具体的にはこんな調子だ。

「まだ話は終わっていない。いいか？　何度も言つが、相手の両足を切斷するなんてやり過ぎの論外もいいところだ。ただ生きたまま捕えるだけだから、他にいくらでも方法はあった」

尻尾でライムの膝をばしばしと叩きながら子猫が説教を続けた。縦長の瞳孔と黄色の虹彩を持つた眼を大きくひろげ、ふわふわの体毛よりもさらに長いヒゲを上下に震わせている。

そんな可愛らしい、小さく幼い身体から発せられるのが人間の言葉、しかも渋い低音というのは、まったく奇妙という他なかつた。

窓際に頬杖をつき、ライムは外を眺める。流れていく昼の景色は森林の静けさばかりで、話題を昨夜のことから他の何かへ変えてくれるようなハプニングも、延々と続く小言から気を紛らわしてくれるような面白さもなかつた。

「つまくこつたんだからいいじゃない

「無用な危険をあえてとる必要はない。もし、血が止まらずにケネスを殺してしまつていたら？　どうするつもりだったのだ

「ああ……。カグマ”先生”ならどうしてたのかな？ 昨日の追いかけっこには、一匹だけ取り残されてたみたいだけど」

ライムは先生の部分を強調した。事実、この子猫 カグマからは多くのことを教わっている身なのだが、今はそういうた敬意をこめていいるわけではない。

「猫の肉体は短距離向けだ、昨夜のように長距離を走らされるのは向いていない。それに私の役目は、あくまで指導の一環に尽る」  
挑発にせられた様子もなくカグマは答えた。面白くないなどライムは内心で呟き、

「結局生きたまま捕まえられたんだから、いいじゃない」

そう言って、深くため息をついた。曇った窓ガラスへ人差し指をあててみると、深まる冬の冷たさが伝わってくる。

「……痛いんだけど」

マルゲリータ、と今食べたいものの名前を恋に描いていると、親指を軽く噛まれた。

「話をきけ話を。終わりよければ全てよしと甘えていたのでは、向上など望めぬぞ。うまくいった場合でも、反省点はいくらでもあるのだから」

「わかったよ、わかった。次からはやりません。反省しました。これでオーケー？」

窓の方を見たまま棒読みで両手を挙げてみせる。

うんざりしていた。バスに乗りこんでからさつきまでずっと熟睡していたくせに、目が覚めて暇をもてあました途端にこれだ。黙つていればそれはもう可愛らしい子猫なのに、口を開けば中身は説教好きの年寄りそのままで。これでは誰でも、相手にしてられなくなるのが普通じやないだろうか。

しばらくの沈黙　本当に嫌な沈黙　を経た後、カグマが語勢を弱めて言った。

「私情があつたのか？」

すばり指摘され、ライムは思わず視線を膝元へと向けてしまう。後悔した時には既に遅し。前足を揃えて座りながら見上げてくる猫の瞳に、がつちり囚われてしまっていた。いまさら嘘もつけず、正直に話すことにする。

「被害者の写真、見たんだ」

思い出しだけで手に力がこもった。

ケネス＝レーンの餌食になつた被害者女性の写真、捜査資料に挟まつていた数枚。食い散らかしの残飯　そんな表現がぴつたりの死体達。

「どこまでもケダモノになれるものなんだね。人ってのはさ

そんな咳きに、カグマは諭すような声で返す。

「ああいつた者の存在は否定できないが、人間全てがそうではない。

少なくとも私達は、ああいつた者達とは対極に立つてゐる……否、立とうとしているはずだ」

噛まれた親指が今度は舐められているのに癒しを感じながら、ライムは両目を瞑つた。

「……うん。少し寝るよ。アリアンロッドに着くまで、まだ時間がかかる」

自分で思つていた以上に疲れていたのだろう。ゆりかごのようなバスの揺れにいざなわれ、眠りへとおちていぐのに、一分とかからなかつた。

### 夢へ霧散していく苛立ちと疑問。

”死は個人にとって終焉である”　この大前提が失われたとき、人間はどうなるのか？

社会が、いや、社会の一部がこの問いへと真剣に向き合い始めたのは、つい最近、ほんの八十年前かそこの話だ。

百年ほど前から始まつた、犯罪発生率の急激な上昇。

とりわけ、強盗・強姦・殺人といった凶悪犯罪の発生率は、ひたすらに増加の一途を辿つていた。

テロリズム最盛期を乗り越え、世界中で貧困問題を解消しつつあつた国際社会において、この現象は誰もが理解できないものだつた。最大多数の最大幸福を　あくまでも経済的にではあるが　達成しつつあつた世の中で、何故犯罪率が上昇しているのか？

多くの主張が叫ばれ、仮説がたてられたが、人々を納得させるものは一つとしてなかつた。

何よりも奇妙だったのは、犯罪者達の自殺率が異常に高まつてゐるという事態だった。

多くの者が留置所で、刑務所で、あるいは裁判所の控え室で自らの命を絶つた。

遺書があることも、無いこともあつた。

自殺の手段も様々だつた。死に際の苦痛が少ないとされる手段をとる者が多かつたものの、あえて苦しめる状況を作つたとしか思えない者もいた。

社会は、血眼になつて原因を究明しようとした。

言い訳を探そうとしたのだ。

『彼らは皆が死と破壊を尊ぶカルト教団の狂信者でした』といつた類の言い訳　人々を安心させる物語を。

だが自殺者達に共通点などなかつた。“少なくとも表面上は”。

現代においても、この異常現象の原因について社会的合意はない。ただ、一部の人々には、はつきりとわかつていた。

アーテマと呼ばれる人間が急増した時期もまた、百年前だつたことを知る人々。

転生によつて法の呪縛から解き放たれた人間、その多くがどうなつてしまふのかを、知つてゐる人々。

そんな人々のさらにごく一部　社会に対する気高き理念と、そ

れを実現させるだけの行動力を持った者達が、活動を始めていた。  
今から八十六年前。同じアートマによるバウンティ・ハンター・システムを統括し、アートマ犯罪者達の刑務所として機能する自由都市・アリアンロッドが設立。

社会は、変革を始めようとしていた。

『まもなく終点 アリアンロッジ、アリアンロッジで』『えこます。』  
乗車のお客様は、お忘れ物をなさるぬようお願ひいたします』

車内アナウンスで目覚めたライムが窓をのぞくと、外はすっかり夜になっていた。

進行方向の先に見えるのは、巨大な刑務所都市の圧倒的威容。天まで届きそうなほど伸びるサーチライトをはじめとした都市の光と、それらをぐるりと取り囲むよじこじしてそびえる高い高い壁。

多くの犯罪者達にとつての監獄であると同時に、ライム達賞金稼ぎにとってのホームタウンであるアリアンロッジは、あの壁の中に多大な人口、知識、技術、そして経済を抱えている。

世界で唯一、アートマの存在を公式に認め、アートマのための制度を整備し、アートマ犯罪に対抗する術を持つ、一大自由都市なのだった。

ゲートを越え、バスはアリアンロッジ内部へと入る。

あぐいを噛み殺し、ライムは軽く両手を上げて身体をのばした。

膝上ではカグマが身体を丸くして眠っている。

「まだ寝てる……」

こつものことながら感心してしまった。バスに乗っていた時間の八割は寝ていたから、二十時間以上の睡眠になる。いくら子猫とはいえよくもまあ眠れるものだ。

わざわざ起こす意味も特になかつたので、その小さな体躯をむん

ずっとつかみ、背にしたバックパックの中へと放りこんだ。

むきや、と鳴き声がきこえたが気にしない。この程度でカグマは起きないからだ。寝込みを襲われでもしたら、おそらく何も抵抗できずいやられるだらう。

運転手のいない自動操縦バスを前へと進んでいき、ライムは降り口付近の機械に親指をかざした。指紋認証によつて口座から自動的に料金が支払われ、スムーズに降車する。

まったくいい時代になつたものだ。

ライムがこの世に初めて生を受けた時代 つまりライムがまだ『一ターン田』だった時代は、硬貨や紙幣といった物的貨幣によつて料金を払つていたと記憶している。

財布をいちいち取り出して、小銭の有無を確認しなければならなかつたあの頃。

そんな煩わしささえも、今となつては懐かしい思い出。

降り立つたのはステーション内部だった。

同じバスだつた乗客の流れに身を任せ、ライムもステーションの通路を進む。

清潔な壁と床は病院のような作りだつた。窓はない。しかし天井にある白いライトの光は、淡く、優しく、来訪者達を迎えていくよううに思えた。

突き当たりにある扉をぐぐり、開けた場所へと出る。

そこでは簡単な手荷物検査が行われていた。

ライムの銃器は既に市へ登録してあつたので問題はない。ただ、カグマを入れたままのバックパックを検査機へ放り込んでしまつたため、係員を驚かせてしまった。そんな騒ぎの中心にいてもなお、

カグマは寝たままだつた。たいした奴だという他ない。

ライムが奥へ進むと、人間一人がなんとか入れるほど黒いボックスが建ち並んでいた。

空いているボックスを開けて中に入る。

内部は青い光に照らされ、金属製の椅子が設置されていた。数十年前まで使われていた死刑用の電気椅子に似ている。

腰掛けると、ヘルメット状の装置がライムの頭部を覆つた。

賞金稼ぎ達が現場で行う簡易認証とは異なる、本格的な精神紋認証。

精神紋は、魂の紋様といつていゝものであるらしい。詳しい仕組みは知らないが、そんなのはどうでもいいことだ。

重要な点は一つだった。

転生によって肉体を渡り歩くつまり指紋や網膜といった生体情報がこうこうと変わるアートマにとって、”私が私であること”を証明するには、精神紋を示すしかない。

不定期に発せられる電子音をききながら目を瞑り、ライムはじっと時間が過ぎるの待つた。

何かされているという感覚は一切ない。だが認証を終えてボックスから出る時はいつも決まって、若干のదるさを感じずにはいられないのだった。

『認証完了しました。登録ID・ライム＝アシュフィルド。ターン・スリー。登録転生タイプ・>再生者<。現ターンにおける生体情報は既に精神紋とリンクされておりますので、このまま左手通路へとお進みください』

ロビーへ出ると体温温度が一度は上がった。

これまでとはうつてかわり、人混みにあふれかえっている。行き交う人々の人種は様々だった。

はるか昔から移民を受け入れ続けてきた歴史を持つ大陸、その各地から人間達が　アートマも、そうじやない者も　集まってきたいるのだから、当然といえば当然ではある。

「まずは『飯かな……』

貧血による軽い目眩を感じながらライムは歩き出した。  
やるべきことは色々あったが、物事には優先順位というものがある。

ライムの場合、具体的には第一が『飯』、次が『金』、その次あたりが『命』といったところ。

人と人の合間をうまく縫いながら、ライムがステーションの外へ出ようとしていた時だった。

「　おかいなさい」

咳きに近い女の声が、喧騒の中、ライムの耳へと届いたのは。

「え？」

声の方角へと視線を向けて立ち止まり、ライムは息をのむ。  
神話にそつて描かれた絵画の一枚かと思える光景が、そこにはあつた。

ロビー中央にあるベンチへと、見知らぬ女性が一人、優雅に腰掛けている。

美しい女性だった。

腰まで届く金髪は、艶やかに波一つなく流れている。

白いワンピースを着ているものの、肌があまりにも白く透き通っているため、服と地肌の境界はわからないくらいだ。

瞳は青く、淡いピンクの唇は引き結ばれている。

じつと、何かに耐えているようだ。

女性の周囲は不思議な空間と化していた。

ベンチは軽く三人が座れるほどの幅があるので、誰も女性の隣には座ろうとしない。

圧倒的な存在感があるにもかかわらず、通行人達は女性へと目を向けようともしない。

まるで女性とベンチだけが、人々の認識する世界から外れているかのようだった。

声も出せず、ライムはただ戸惑った。自分が話しかけられたのだという確証もない。

そうして目を逸らした次の瞬間にはもう、女性の姿は消えていた。幻でも見たのだろうか……。

バックパックの中でカグマが寝返るのを背中に感じ、ライムはハツと我にかえった。頭を振りながら、今や誰も座っていないベンチへと歩み寄る。

「これは……？」

女性が座っていた場所に落ちていたものを拾い上げ、首を傾げた。雪のよじに白く、羽ばたく鳥のそれに似た、羽根の一枚だった。

小さな酒場にはまつたく似合わない料理の前に座り、カグマが真剣な声で問う。

「『』のタイは？」

「大陸の西海岸でとれた、今が旬のものだ」

カウンターの中に立つ老人が誇らしげに答えた。この店のマスターで、名をジーンという。ライム達にとっては、三年前に初めてこの都市を訪れて以来の顔なじみだ。

「米は？」

「東方から取り寄せた、粥に最適の品種だ」

「茶は？」

「カフェインの少ないほうじ番茶。もちろん最高級」

「さすがの仕事だ、ご主人。痛み入る」

一礼し、カグマはタイ茶漬けの盛られた椀へと口をつけはじめた。

「おか、わり」

一方のライムはといえば、既に何枚もの空き皿をテーブルへと重ねつつ、さらなる料理へと取りかかっている。

食事中はいつも、口が一つあればいいこと思わずにはいられない。

おいしい料理を食べるという行為には、常に葛藤が存在しているものだ。よく噛まねばならないと自分に言い聞かせつつも、すぐに飲みこんで次をほおぱりたいという欲求と戦わねばならない。だから口は素早く噛むのに大忙しで、注文のために喋る暇すら惜しいのだった。

「食つか喋るかどっちかにしろ」

そんなライムを見たジーンがおおらかに笑った。

「だいたい、おかわりとだけ言われてもわからん。どの料理の話だ？」

「さつき、頼んだ、のを、全部

「……ま、こっちとしては商売繁盛で助かるがね。ツケにせずちゃんと払ってくれればの話だが」

ジーンの言葉の後半を、ライムは聞こえなかったことにした。  
といつても、ケネスの賞金が入ったから、今はまだちゃんと代金も支払えるはずだった。今はまだ。

追加が来る前に残りの料理も食べ尽くし、一息ついた。

テーブルに肘をついてカグマを見ると、茶漬け一杯をまだびちびちやっている。少し口に含んではアグアグと噛む仕草が、いかにも子猫だ。

「食べるの遅いなあ

からかつたつもりなのだが、返ってきたのはきつこ言葉だった。

「”料理”とは、食べるものではない。味わうものだ。”餌”ならば、お前のように書きこんでもかまわないが」

「猫に言われた……」

そこでカグマが椀から一旦顔を上げ、向き直った。ライムは嫌な予感に顔をしかめる。この姿勢、説教が始まる前兆だ。

「それにだ。お前は作法というものがなっていない。女にあるまじきことだ。今だつてそう。机の上に、肘などつくものではない」

「つむさーなあ……。勘定はわたし持ちなんだから、ちよつとは慎ましくしなよ」

「やういつ契約だろう、私とお前の」

「ぐつ……」

言い返せずにライムは渋々と肘を上げ、背筋を伸ばした。

逃げるようすにカウンターを見ると、ジーンがピザか何かをオープンから取り出していた。チーズの焼けるいい匂いがしていた。

「私はお前に戦い方を教える。お前は賞金稼ぎとして私の食費を払いながら むぎゅあ

カグマの言葉は途中で遮られた。背後から伸びる手に、両頬を押

れんつけられてる。

「 ネコさん。」

幼い女の子が、田を輝かせながらカグマへと抱きついていた。

「 ぬえーひゃんえあぬあい、ふあふまふあ

「 ーしゃべつたーでも、ネコ語じやわからなこよ。」

ぶるぶると首を振つてカグマは女の子の手を払いのけた。

「 猫さんではない、カグマだ」

「 ー ネコさんすいこー。」

「 だから猫さんではないと…………」

はしゃべぐ女の子を前にしてカグマが戸惑つているところへ、ジー  
ンが焼きたてのマルゲリータを持ってきた。バジルとチーズとトマト  
のみとこう、シンプル・イズ・ベストを体現したピザだ。

「 シエス。調子はこのか?」

「 うん! だいじょうぶだよ、おじいちゃん!」

「 おじいちゃん?」

カグマが驚くのへ、ジーンが曖昧につなづく。

「色々あつてな。息子夫婦のところから引き取つたのや」

「ふむ。なるほど」

察するところがあつたのか、カグマはそれ以上深く訊こうとはしなかつた。

一方のライムはマルゲリータにしか興味がなく、会話へは不参加を決めこんでいた。

椅子を静かにずらすことで離した一メートル先では、ショスと呼ばれた女の子がカグマに夢中となつている。

「ネコさんは、どうしておはなしができるの?」

「だから猫……もついい。そうだな、人の言葉を話せる理由は……私にもわからない」

「え? わからない?」

大きな瞳をさらに大きくするショスの前で、カグマは神妙にうなずいてみせた。

「つむ。私には過去の記憶がない。否、多くのことを憶えてはいるが、思い出せないこともまた多いのだ。情けない話だが」

よく意味が飲みこめていないので、ショスは首を横に傾げながらうなずいていた。

「ふうん……」

「でもネコさんなら、カワイイからだいじょうぶだよ

「何が大丈夫か理解できないのだが、それもまたいいだろ？」

カグマはまんざりでもない様子で茶漬けを味わっていた。ライムに対する態度と違つて、子供には優しいようだ。

二人の会話を遠巻きに眺めるライムの横へ、ジーンがスペゲッティを置いた。

「しばらぐはーの都市こじるのか？」

「うーん……賞金首でめぼしい奴はいる？」

「今は時期が悪いな。よそそな獲物はどれも遠出になるだ

ジーンはたくわえたヒゲをなでながらうなつた。

優秀なのは料理の腕だけではない。情報屋としてのジーンも頼れる存在であり、ライム達がアリアンロッドを拠点としている理由でもあった。

「そつか。じゃあしばらぐこるよ」

ライムはスペゲッティの皿を引き寄せてタバスコを半ボトル分ふりかける。先程も半分使っていたので、ボトルは空になってしまった。

「なあ、お前さん子供は嫌いか？」

激辛スペゲッティの至福を味わつていると、ジーンがぽつりと聞いてきた。

長いパスタを一通りすりきつてから、ライムは訝しげに問い合わせ返

す。

「どうしてそんなこと訊くの」

「嫌いじゃないなら、お前さんもショスにかまつてもうえると助かるからさ。この都市には、友達になれる子は少ないからなあ」「

口調とは裏腹に、ジーンの声からは切な想いが感じられた。

無理もないな、とライムも思う。

アリアンロッジには子供が少ない。この都市にはアートマ非アートマ問わず多くの人間達が住んでいるが、子供を作ろうとする者は稀だ。

その理由は明白だった。

アリアンロッジ市民は皆、知っているからだ。アートマという存在がこの世にいることを。

”生まれてくる自分の子供が、アートマであるかもしれないという可能性を”。

「悪いんだけど、わたし、子供は嫌いだから」

「なに、そうだったのか？」

沈んだ様子のジーンを前に、ライムはスパゲッティをフォークで絡め取りながら答えた。

「立場が対等じゃないからさ。子供とつきあっても、わたしが得することは何もない。ギヴァンドテイクな関係が成り立たない。今だつて、あなたの料理が絶品じゃなければ、話なんかしてないだろうね」

それにね、と水を一口含んで続ける。

「あなたは忘れてるかもしないけど、わたしはアートマの二eteranganだ。今までを合計すれば五十年近く生きてる。子供扱いされても困るよ」

「……そうか、すまなかつた」

「まあ、いいんだけど」

ぱつが悪くなつたライムはさらなるスペゲッティへと逃げた。ジーンのようなアートマでない人間と話すと、時々こういつたすぐ違ひが起くる。彼らはわかつていないので。いや、頭でしか理解していないというべきか。

生まれ変わり、外見が幼くなつても、精神まで幼くなるわけではない。

そんな素晴らしいことは起こりえないのだ。

あつとこづ間にパスタをたいらげ、ライムは両手を組めて息を吐いた。

もし、精神が退行できるのなら。もし、もう一度自分の心を作り直せるのなら。

そこまで考へて、馬鹿らしさに苦笑いした。ありえないことを夢想できるだけ、まだまだ自分も子供なのかもしない。

ふと目を向けると、いつの間にやらショスにみつめられていた。水の入ったコップをどんと鳴らして脅され、幼い女の子は小動物

のように身を引く。『わふと抱きしめられたカグマが苦しかつ』も  
がいていた。

まつたく、子供相手に嫌な奴だ。

内心で自嘲しながら残りの水も飲み干し、ライムは席を立つてレジへと歩き始めた。

シロスは震えながらもまだライムを見つめている。にらみつけてやると、今度こそ完全に一人のつなぎは断たれた。

「……それでいい

誰にもせいえないよ、小さく呟く。

それが最善だった。

こんな嫌な人間には、関わるべきじゃない。

壁と床が強化素材でできた、レンタル制の戦闘訓練場。ただしスポーツ向けとしても貸し出されているからか、内装はいかにも体育館といった趣だった。

トリガーを連続で絞りながら、ライムは唇を強く噛む。銃撃は一度としてカグマを捉えていなかつた。その影にかすることさえも。

「無駄が多い」

たつた一言を述べ、カグマが壁を蹴つた。両者の距離が急速に縮まる。小さな足に伸びた爪が煌めく。

一人と一匹の交錯。

放つたロープは空を切り、銃弾は壁に当たつて虚しい反響音を鳴らした。

「くそつ」

ライムは自らの首筋をおさえた。たつた今できただばかりのかすり傷から、血がわずかに流れ出ている。

かすり傷といつても、あくまで手加減された上での結果だ。本来なら頸動脈を掻き切られていたはず。いや、首を落とされていた可能性の方が高いか。

圧倒的な戦闘力の差がそこにはあった。

傷が急速に治癒していく熱を感じながら、大きく息を吸つて気持ちを切り替える。

集中が必要だつた。訓練が始まつてからつけられたかすり傷は六

つ。つまり、既に六回は首を落とされたこと「う」と。

「<sup>△</sup>支配率<sup>△</sup>の高さを活かせていない。筋力はそれ以上出さな、無駄だ。力を出すべき箇所、力を抜くべき箇所を明確に把握し、コントロールしろ」

空間を縦横無尽に移動しながらカグマが言った。とんでもないスピードだった。前後左右から声が聞こえてくるので、ライムが乗り物酔いに似た感覚に襲われてしまつほど。

「わかつてゐる、わかつてるとも」

「真に理解しているならば、実行は容易い。実行できないのは理解が及んでいないからだ」

言われた次の瞬間には、七つ田のかすり傷が増えていた。

「お前の支配率なら、私の攻撃に反応くらいは出来るはずだ。後は、そのぎこちない動きをなんとかすればいい」

「言いたい放題言つてくれるね」

頭に血がのぼっているのに氣づき、ライムは慌てて精神を落ち着けた。これも訓練の一つだった。相手の言動にいちいち心をぐらつかせているようでは、賞金稼ぎの仕事などこなせない。

「それが師といつものとのつとめだからな。まあ、来い

立ち止まつたカグマが尻尾をひょいひょいと振つて挑発してきた。ライムも両手をだらんと下げる、全身の力を抜く。

「……いくよ」

呼吸を整え、神経を研ぎ澄まし もう一度、支配率を引き上げた。

知覚が、加速を始める。

『魂』と『肉体』の支配率が、『五〇・五〇』の初期状態から変化していく。互いに影響し合っていた両者の均衡が崩れる。魂は勢力を増し、肉体への命令権を強めていく。一方、肉体が魂へと及ぼしていた影響 すなわち疲労感や苦痛が軽減され、無用な意識の乱れが取り除かれていく。

どこまでもクリアな意識。明瞭な思考。

ワックスで磨かれたつるつるの床を蹴り、ライムは飛び上がった。

支配率六〇・四〇。六五・三五。そして七〇・三〇 筋肉はリミッターを外され、本来なら考えられないほどの脅力を発揮する。筋繊維の収縮と弛緩、その一つ一つが意識され、精密にコントロールされ、洗練されていく。

地面から十五メートルの高さにある天井、そこに張り巡らされた鉄骨の一本へとロープを絡ませ、ライムは左手一本でぶら下がった。銃を持ち上げ、照準をつけ、トリガーを引き、反動を処理するこれら一連の動作の中で使用される、何十、何百もの筋肉を一つ一つ意識的に制御し、肉体に任せっきりだった場合よりも遙かに高速かつ正確な射撃が実現される。

そうして放たれた銃弾すらも全て回避し、カグマが叫んだ。

「まだだ遅い！ 肉体に好き勝手させるな。細かい動きすべてを統

率しろ。筋肉を、神経を把握し、命令し、服従せしろ。一瞬一瞬で理想的な動きをその都度組み立て、お前を構成するすべてのパートを一つの動きに向けて団結せしろ」

「無茶苦茶言いつなあ……」

鉄骨へと巻き付けたロープによつて宙を舞いながら、ライムは苦笑した。が、カグマが言う限り、それは努力次第で可能な無茶苦茶であるはずだつた。

いつだつてそうだ。カグマはライムのためになることしか言わない。ライムが強くなるための、最も短い道筋を示してくれる。事実、出会つてからたつたの三年半でライムがここまで賞金稼ぎとしての実力を身につけられたのは、すべてカグマのおかげなのだから。

「やつてやる。見てるー！」

「つむ。やつてみろ！」

二人は互いに叫んだ。楽しそうに。本当に楽しそうに。

鉄筋からロープを外し、ライムは上空から一直線にカグマへと飛びかかつた。

銃撃による成果を上げられないまま着地。当然のようにカグマの姿はなかつた。死角に入られたのか、視覚による位置把握は追いついていない。代わりに、研ぎ澄まされた皮膚感覚が空気の流れを読んだ。

真後ろ。

そう結論づけ、ライムは振り向きもせずに腕だけをまわして発砲した。攻撃結果など確認しない。その一瞬が無駄だ。勘定をいちいち気にしながら食事を注文するくらいの無駄。銃弾は外れたという

前提で次の行動を開始すべきだったし、そうしていた。

襲い来る爪を寸でのところでかわしつつ、立て続けにトリガーを引いた。

銃弾は相変わらずカグマの実体を捉えられない。

しかし、カグマの影になら当たるようになつてきていた。訓練場へと射しこむ陽光によつて形作られる、長い長い影。その末端、駆けて搖れる尻尾のシルエットに細くへんこには、照準が合つてきていたのだった。

「まづまづだな」

その声が聞こえる寸前には既に、ライムは側方へ身体を投げ出している。

首筋付近を風圧　　というよりカマイタチに近い迅風が駆け抜けていった。

カグマの右手によるなぎ払い。先程までと比べて明らかに力強い一撃だった。かわしたはずなのに、首のかすり傷がハツ田をカウントしている。

首の痛みに思わずぞっとした。横つ飛びが少しでも遅れていたら、かすり傷では済まないことになつていたところだ。

「上等。ぞくぞくするね」

ライムは瞬時に理解していた。

手加減のレベルが下げるられたのだ。こじらの動きがよくなつたのを感じ取り、カグマもそれに合わせてきたのだらう。

これがカグマの厳しさだった。気が抜けない　　訓練中でも一步間違えれば殺される。

もちろんライムの銃にだつて実弾がこめられていた。殺し合いだつた。死線の中でしか実力は上がらない カグマはいつもそう言つている。

死んだら死んだで、私達ならどうともなるだろ、とも。

カグマは訓練場内を動き回つていた。

いや、跳ね回つていたと言つたほうが正しい。壁を、床を、天井を蹴り、立体的な動きでライムを翻弄しようとしていた。段階が上がつていたのは、攻撃の苛烈さだけではないようだ。目で追いきれないほどのスピードと、動きを読ませない奇抜さ、ランダムさ。いくら支配率を上げたところで、もはや単純な五感では読み切れない段階だった。

ならば。

ライムは両目を瞑り、カグマの動きを追うのも、読むのも止めた。無駄なことだつたからだ。何かが見えるといつことは、時に、その何かに振り回されるということでもある。無駄なリソース消費は即座に切り捨てるべきだつた。選択と集中。自分の限られた意識を、より効率的に運用するための。

感覚を、指先のみに集中した。

胸に巻き付けていたロープを解放し、自分の周囲へと張り巡らせる。蜘蛛の巣のように、子猫すらくぐれないほどの細かい網田である。こういつた狭い空間でこそ使える、簡易な結界だつた。といつても、防御性能そのものは期待できない。特殊な纖維を編み込んで作られたロープは相当な強度だが、カグマの前ではそれこそ蜘蛛の糸同然だらう。

重要なのは、たとえロープが切り裂かれてしまったとしても、カグマが襲いかかつてくる方角をすばやく察知できるということだつ

た。

巣の中央で、ライムはじっと獲物を待ち構え続けた。

ロープを握る手が震えていた。

カグマが裏をかいくるんじゃないのか。自分が考えつきもしなかつた方法で、結界を抜けてくるんじゃないのか。獲物とは、自分のことなんじやないか。

そんな恐怖と不安を押しこめながら、ライムは待った。張り巡らせたロープのどこかが切られる瞬間を。

しかし、カグマは来なかつた。

ライムはロープだけに集中していた。神経がすり切れて、指先の痛みを幻覚するほどに、長い間。

だからカグマが戦闘を止めて呼びかけていることも、しばらく気づけないでいた。

自分の肉体、その指先以外の箇所で、何が起こっているかにも。

「　おい、きけ！　ライム、訓練は終わりだ。　　ライム！」

「えっ？」

目を開けて集中から解放された途端、ライムは膝から力が抜けていくのを感じた。

床に両手をつきながら、全てを理解する。自分に何が起こったのかを。そして、カグマが訓練を止めた理由を。

床に血が広がっていた。

それは間違いなくライムの血だったが、カグマに傷つけられて流

れたのではなかつた。

外傷はない。

誰のせいでもなかつた。

あえて言つならば、神様のせいで流れ出た血だ。

「あー……。最近、調子良かつたのにあ

自分の口が吐血していのを把握し、ライムはぼんやりと呟いた。  
ライム自身の体細胞が赤黒い粒となつて固まり、血溜まりの表面に  
うかんでいる。

「すまない、私も油断していた。お前の体調がここまで悪化してい  
たとは……」

身体が赤く染まるのもかまわず、カグマはライムの膝へと前足を  
のせた。その声は動搖し、目一杯の気遣いに満ちている。

「ちょっと……行つてくる。悪いんだけど、この床片付けておいて  
くれない？」罰金くらつちやう

ここがレンタル制であることを憂慮してみせながら、ライムは立  
ち上がり歩き出した。

うんざつしていた。

本当は、ライムの方こそ謝りたかったのだ。カグマの美しい灰色  
の毛が、血で汚れてしまったから。

だが言葉には出せなかつた。

血文字で『ごめんね』とでも書いてやろうか そんな冗談がう  
かんだ。悪趣味さのあまり、ひきつるように笑つてしまつ。

口の端にできた血泡を噛みつぶすと、鉄の味が舌一杯に広がって  
いった。

## 同心円状に広がるアリアンロッドの街並み。

その中央には、東西へ向かつて巨大な断層が走っている。その断層は、都市の南北間に百五十メートル以上の高低差を作りだし、断層より北半分を『上層』、南半分を『下層』に区分していた。

断層と垂直に交わる角度で、都市の中央を北から南に向かつて流れるのは、幾つもの水流が一本に寄り集まつてできたエイル大河だ。河幅は七百メートルを優に超えており　人々は、隔てられた東と西の区間をつなぐ何本もの大橋の上から、あるいは年中無休で運行されている定期船の上から、大いなるエイルの清らかな流れ眺め、堪能することができる。

そして、断層と大河が交差する場所　都市の中心で轟音をたえず響かせている莫大な水流の落下点こそが、『アリアンロッドの滝』と呼ばれる世界的有名な大瀑布だった。

この滝と、その隣に佇む壯觀な高層建築物の一つは、刑務所都市の一大観光名所として知られている。

### アートマ犯罪者収容施設　フラウ・ゲフェス。

断層崖へと張りつくように建てられた、一見すれば古めかしい塔とも呼べる威容は、地表に出ている部分だけでも断層の八割、つまり高さ百二十メートルにまで到達している。地下を含めた全長となれば、二百や三百メートルは超えるといわれているが、実際の詳しいデータをライムは知らない。

刑務所都市であるアリアンロッドの中心、かつ最重要施設であるフラウ・ゲフェス内のエレベーターに、ライムはいた。

カグマもおらずたつた一人で、武器すらも持つていなかった。だが心配はなかつた。当たり前の話だが、ここは刑務所の中。銃やペツト  
こう表現されるのはカグマにとって不本意だろうが、の持ちこみは禁止されている。もちろんセキュリティも万全。なにせ、大陸中から集められたアートマ犯罪者達を収容しているのだ。仮に何か異変が起きて、それが囚人達の脱走を招きでもしたら、とてつもない騒ぎとなつてしまふだろ？

エレベーターは地上二十五階で止まつた。鉄の箱から降りて一本道の通路を進んだ先には扉があり、すぐ横の壁にインターホンが取りつけられている。白壁の内装といい、いかにも診療所といった感じのフロアだつた。

だが、実際はそうではない。

このフロアも間違いなく監獄だつた。この先にいる“たつた一人の囚人”のためだけに設けられた、広い檻の中なのだ。

ライムはインター ホンを押し、天井角につけられた監視カメラを見上げた。扉が自動的に開き、来客を、いや患者を招き入れた。

「いらっしゃい。一年半ぶりかしら？」

入つてすぐのロビーを抜けた先の部屋。中央に置かれたシックなソファに座り、ライムへと手を振つている服役囚がいた。といつても、着ているのは囚人服ではなく白衣だつたが。

「そうだね。久しぶり、つて言つてもいいのかな？ ドクター」

「微妙なところだわねえ。今は昔と違つて、一年一昔とはいふけれど」

紅茶のカップに口をつけながら、ドクターと呼ばれた人物は微笑んでみせた。軽くかきあげた長髪が柔らかに流れる。

「ドクターは、うんざりするくらい変わつてないけどね」

ライムも笑いながらドクターを見た。

ライムの記憶によると、ドクターは現ターンで四十代に入してからはずだつたが、どうみても二十代にしかみえない。

線の細い美貌をしているが、本人曰く生物学的には男なのだとう。『超絶美形天才科学者』という自称も確かにうなずけるほどの容姿であるものの……。いくらかの顔見知りであるライムからすれば、その自称の頭に『残念な』という言葉を付け加えざるをえない。

「アナタは変わっちゃつたわ……なあに？ その身体は」

突然立ち上がつたかと思うと、ドクターは勢いよくライムへ詰め寄つた。その細面が鬼の形相をつかべている。

「は？」

「ここの身体よ！ どういうこことー？ 前に会つた時はまだ、男の子みたいだつたのに。ワタクシ好みのボーイッシュな天使だつたのに！」

ものすごい力でライムの右肩をつかみながら、ドクターは身体のあちこちをつついてきた。

「ちよ、どこ触つて……」

「こんなに育つちゃって。女らしくなつひやつて！ 嘆かわしいことだわ！」

そんな絶叫に耳を塞ぎつつ、ライムはドクターの痩せた長身を蹴り飛ばした。

そして自らの思い違いを知る。この建物内が安全だなんて嘘だ、やつぱり銃は必要だつた。

「つるやいなあ。だいたいなんだよ、男の子みたいだつたつて。馬鹿にしてるの……」

文句は言つものの、ライムの心に嫌悪の感情はうかんでこなかつた。どうみても行動が変態であるにも関わらず、いやらしさを感じさせないのは、その中性的な容姿からなのか。それともドクター本人の個性からなのか。

「死ねばいいのに。今すぐ死ねばいいのに。死んで生まれ変わって、あの頃に戻ればいいのよ。性的に未分化だつたあの頃に」

吹き飛ばされてソファにもたれかかったまま、ドクターは真顔でぶつぶつと呪詛を唱えた。

「男がほしけなら他をあたつて」

「美しき口じやなきやだめなのよ」

「……頭痛くなつてきた」

「あら、不調がついて脳まできちゃつたのかしら」

おどけた口調とは裏腹に、ドクターは切れ長な目元を突然引き締め、眼鏡の位置を直した。

ライムも表情を硬くしながら、口元だけで笑つてみせる。

「だったら、治してくれるわけ?」

返答は、もちろん無かった。  
始めから期待もしていない。

聴診と触診の最中、ドクターは常に小声で呟き続けていた。内容は聞き取れないが、どうやら眞面目に診察してくれているらしい。ならばライムがとやかくいうこともなかつた。

「興味深い。とつても興味深いわ。ふふ……」

ただ、ときどきうつとりした表情で涎を拭うのだけはやめてほしかつた。気味が悪いし、自分が実験動物にでもなつた気分だ。事実、実験動物なのかもしれないが。

一通りの診察を終えて考えこむドクターに、ライムは問いかけた。

「で……」今回のわたしは、あと何年もつ?』

「変わらないわ。あと二、四年」

ドクターはあっさり返答した。

「アナタの言つていた一ターン目、一ターン目の時と同じか、それより早くかもしない。二十歳のハッピー・バースデイを迎える前に、アナタは死ぬわ」

「そつか。やつぱりね

「落ち着いてるわね?」

「死ぬのにも、もう慣れたからね。こいつの原因も、まだわからない?」

「血の胸の中心を親指で示しながらライムは淡々と訊いた。ドクターの言葉が慎重になる。

「発作の原因なら、仮説はたててあるの。まつきつとは言つ切れな  
いけどね」

「教えて」

「きいても、現状は変わらないけれど……まあいいわ。アナタ、転生タイプは、再生者、だつたわよね？」何度でも、同じ形をした肉体へ転生するタイプ”。これが問題だと想つの」

ドクターが急に転生タイプの話を持ち出したので、ライムは戸惑つた。

いわゆる、転生の仕方　　どんな肉体へと生まれ変わるかについて、その傾向にはアートマ間で違いがあるといわれている。

たいていのアートマは、性別や人種が固定される一方、細かな姿や体型、身体能力などが転生のたびに変わるものだ。そういうた『普通のアートマ』から外れる者については、アリアンロッドの研究機関により、転生タイプと称される特殊類型があてはめられていた。

だからといって、転生タイプがどうしたという話なのだが。

「再生者なのが問題だなんて、当たり前じゃない。なにをいまさら……」

ライムは眉間にしわを寄せた。ドクターに言わなくとも、わからりきつた話だった。

もし自分が、再生者じゃなかつたら。

もし、今とは違う形の肉体へと生まれ変われるのなら。

なにも問題はなかつたはずなのだ。

発作の原因がなんだろうと、どうでもいい。不治の病だろうとか  
まわない。

なにせ、再生者以外のアートマなら、”そのまま死ねばいいのだ  
”。死んで、健康的な肉体へと生まれ変わればいい。それだけの話  
だつた。

だがライムは違つた。この世に生まれ、病によつて二十になる前  
に死に、また同じ奇病を持つて生まれてくる。長生きなんだか短命  
なんだかよくわからない、ジョークのような人生だつた。このいか  
れた運命の輪をどうにかしたくて、一年前、ジーンの紹介でドクタ  
ーを訪ねたのだ。

「違うわよ。もひ、話を最後まででききなさいな」

ドクターは唇を尖らせ、ライムの額をつついた。

ただし、いくらかの殺氣をこめて。

ライムすら反応できぬいほどのスピードで。

「 再生者には、とっても不思議な特徴があるわ

ライムの額から流れ出る血を指先ですくい、舐め取りながら、ド  
クターは説明を続けた。

「血の再生能力。アナタ達は、多少の傷ならすぐに治してしまつ。もつとも、再生には『痛み』と『血液』を必要とするみたいだけど」

殺氣は既になく、こつものふぞけた調子に床つている。

「お、驚かさないでよ」

爪の先ほどの小さな傷が癒えるのを感じつつ、ライムはそわそわと息を吐いた。背筋はまだ凍りついたままだ。

ドクターは時にこうしてライムをからかってくれる。遊ばれているのだ。『面白い病状だから』という理由で無料診察を受けている立場ではあるが、正直勘弁してほしい。

「再生者は、同じ肉体の形で生まれ変わる。再生者は、己の傷をすぐ治せる。この二つの特性は、一見無関係にみえて、根は同じ『魂の恒常性』によつて成立している。ワタクシは、そう考えてゐるわ」

「魂の……恒常性？」

「そう。魂が”アナタの形”を憶えていて、肉体をその形に保とうとするつてこと。違う肉体への変化を拒否し、肉体の欠損をただちに修復する。どちらも、恒常性が發揮された結果なのよ。わかるかしらん？」

「なんとなく、だけど。でも、それと病気になんの関係が？」

「アナタの身体にある異常、頻繁に起つる発作の原因は、おそらく病気じゃない。完璧な再生者ゆえの帰結、ただそれだけにすぎないのかも」

ドクターはライムの右手を取り、五指を広げさせた。

「一口に再生者といつても、”程度”があるわ。大抵の再生者は、外見や潜在的身体能力が前世と同じってのがせいぜい。けれどアナタは、前世の完璧なコピーとして生まれ変わってるわよね。連邦のデータベースにちょっと進入して調べてみたんだけど……アナタ、指紋すら同じでしょう？ 十六年前の自殺者リストから、今のアナタと一致する指紋を見つけちゃったのよ」

突然の指摘に取り乱すのをなんとか抑え、ライムは頬杖をついた。

「勝手に過去をかぎまわられるのは、あまりいい気分じゃないな」「いいじゃない、大目にみなさいよ。でね、ここからが本題なんだけど」「

一方、ドクターの態度は相変わらず軽い。  
その軽さを見ているうちに、ライムの怒りも宙へつかび、散つていった。

必要なのはただのデータで、過去なんてたいして重要じゃない。その意味するところなど氣にもしていない。そう言われているように思えたのだ。

「再生者であるが故の魂の恒常性、その働きがアナタの場合は強すぎて、肉体が耐えきれずにいるんじゃないかなって思うの。要するに暴走してるのね。癌に近いものだつてイメージしてくれれば、少しはわかつてもらえるかしら」

「ふうん……。なるほどね

「そつちから訊いてきたわりには、なんだか興味なさそつね」

ドクターは手をひらひらと振った。ライムも頭の後ろに手を組み、背もたれへともたれかかる。

「だつて結局、再生者なのが問題だつてのは変わらないじやない」

「大きく違うわよ。ただの病気なら、科学でいつか解明できる。けれどあなたのそれは、おやうく、科学じやどつじょつもない」

「どうして？」

「観測ができないから」

ドクターは立ち上がり、診察室の隣にあるキッチンで紅茶を淹れ始めた。

「観測できないものに対して科学は手を出せない。そして、魂は観測できない。アートマに関係する現象には常に魂が関わつてくるけれどそもそも魂つてなんなのよ？ そんなことすらも、ワタクシ達はさつぱりわかつてない。肉体への対処療法、アナタの場合なら細胞分裂を抑制する薬を投与したりなんかはできるけれど、根本的な治療は無理ね」

上品な香りを含んだ湯気を立ち昇らせながら、チョコレート・キーもついたティーセットが運ばれてくる。いつもならすかさず飛びついているはずだが、今のライムは食欲がなかつた。

「……そつか」

不安があふれ出で止まらずにいた。

一生、自分はこのままなのか。一生どうりじやない。一つの一生を終えても、始まるのはまた次の一生だつた。

ドクターが紅茶を一杯すすり、わざとらしく深刻な表情を作つた。

「アマリ、キラオトサナイテ」

「励ましてくれるのはいいけど、その棒読み、もつちよつとなんとかならないの」

なんとか微笑むのに成功した。どうにもならない気持ちを振り払うため、勢いこんでフォークを握る。ケーキのビターな甘みへと意識的に酔いしれ、紅茶を一気に飲み干した。紅茶一杯のためなら、世界など滅んでもいい。そう昔に言つたのは誰だったか。

「うと。ちょっと失礼するわね」

——口一叩きライムの様子を眺めていたドクターが、両目を閉じてうつむいた。どうやら体内通信で誰かと喋つてゐるようだ。

その場で黙り込んだドクターを前にして、ライムは手持ちぶさたになつてしまつ。紅茶とケーキは素晴らしい味だったが、いかんせん量が少な過ぎた。

診察も終えたし帰るうかと腰をつかせると、今度はドクターの右手に止められてしまつ。どうやら、まだ何か用があるらしい。

何もしないでいるとまた気持ちが暗くなるのがわかりきついていたので、何か別なことに興味を向けることにした。

周囲を軽く見回してみただけで、”それ”はみつかつた。

清潔な部屋、上等な紅茶とケーキ。カップや皿は高級そうな陶器で、テーブルやソファもしつかりとしたものだ。ライムのよう、常日頃から財布の薄さと胃袋の空き具合に頭を悩ませる生活とは、ほど遠い世界。ここがドクター一人を収監しておくための監獄だといふのは、あまりにもおかしくはないだろうか。

体内通信の件だってそうだ。一昔前でいう携帯電話並に、一般にも普及している技術ではあるものの、体内通信装置の所持を囚人が許可されるとは通常考えにくい。

明らかにドクターは他の服役囚と違う。

特別扱いされているのだ。

いつたい、ドクターは何故つかまつたのか？  
そして、ここでなにをしてこるのであつ？

そんな一つ疑問が、ライムの中で今さらのようこわいた。前々からなんとなく感じていたことではあったのだが、質問してみるにはいい機会かもしれない。

通信を終えたドクターにさつやく尋ねてみると、嬉しそうな笑みが返ってきた。

「あらちゅうどいこわ。神様のお導きかしら。 とても、とっても、  
いい具合じゃないの」

ついてくるよう手招きしながら歩き始めたドクターの背中を見て、ライムは低く呟いたのだった。

「やつぱり、帰るべきだったかなあ……」

一度として鉄格子などは通過せず、ドクターはあっけなく牢獄から出て、エレベーターの中に入った。

手錠すらかかるないとアピールしているのか、その両手をぶんぶん回してみせる。

「自由でしょう？ ワタクシへの拘束は存在しないわ。だって意味がないから」

「意味がない？」

エレベーターの下降を感じながらライムは言葉を反芻した。  
そこで初めて気がつく。フラン・ゲフェス内におけるアートマ犯罪者の『拘束』とは、どういったものなのだろう。

”自分は、それを知らない”。

賞金稼ぎとしてのライムの仕事は、犯罪者を捕らえ、アリアンロッドが統括する機関に引き渡すまでだ。

それまでの拘束方法ならば、もちろんわかる。両手両足の自由を奪い その際の手段は問わない だが決して殺さないよう、つまり自殺もさせないように、がんじがらめにするのだ。捕らえられたアートマ犯罪者にとって、死は逃亡手段の一つなのだから、当然の処置といえる。

しかし、刑務所に入つてからは?  
どう拘束されるというのか?

「ワタクシを拘束する方法はない。だってワタクシ、いつだって逃

げられるから。支配率を上げて脳内物質を操作すれば、自由に自殺できるんだもの。手足を封じられたって関係ないのよ」

地下十一階を表示したところでエレベーターは止まった。歩き出るドクターを追いながら、ライムは驚きを隠せずにいた。

「やっぱり変態なんだなあ、いろんな意味で」

脳へと命令を下して支配するのは、肉体操作の中でも最も難しい技術の一つだ。脳が魂と肉体をつなげる媒介であり、限りなく”魂に近い肉体”だからというのがその理由とされている。

魂は、魂自身を支配できない。

”わたし”は、”わたし”をどうにもできない。

「ねえ……わたし達、どこに向かってるの？」

ライムの問いが一本道の通路に反響していた。内装はやはり白で、先程の階と違いは無い。ただ、薄暗さと冷たく湿った空気のせいか、ライムの受ける印象は違っていた。診療所というよりも、入院施設といった感じだ。

「囚人達の監獄であり、ワタクシの研究室よ」

フラウ・ゲフェスに来てから初の鉄格子を抜けたところで、ドクターが振り向いた。

「準備はいいかしら？　ここを一般人に見せるのは、アナタがハ・ジ・メ・テ」

艶やかな声と共に、鋼鉄の扉が開かれる。

広がっていたのは、心のどこかで予想していた光景。

違つていてほしかつた惨状。

ドクターとは違い、自由に自殺なんかできない者　「ごく一般的なアートマ犯罪者達の末路だった。

「……最高に悪趣味だね。反吐が出るよ

前髪をかきあげる手を額にあてたまま、ライムは目を鋭く細めた。

闇の奥へと伸びる通路。

左右に連なる部屋の様子が、大きな窓を通じて見えた。部屋の一つ一つに囚人達の寝台が置かれている。部屋は静かで清潔に保たれており、監獄というよりも病棟のようだ。

点滴か何かの管をつけた囚人達は、皆が身じろぎ一つせず横たわっていた。眠つているわけではない。口にはマスクがはめられ、囚人服の代わりに拘束衣が着せられていた。身体の自由を制限されているのだ。

「こんな環境で何十年も……」

歪んだ自分の顔がうつすらと反射している窓へと手をあて、ライムは囚人の様子を近くからみつめた。

自殺を防ぐためとはいっても、人権という言葉が欠片も見あたらない場所。拘束衣には身体がいくらか動けるだけの余裕があるようだったが、囚人達はそのわずかな自由すらも放棄しているようだった。長い年月が、囚人達を生きた死体へと変えたのだろう。半端に開かれた瞳に光はなく、眼球の動きさえもない。ただ、定期的なまばたきがあるだけで。

「みんながみんな、こんな待遇つてわけじゃないわ。刑期五十年以上か、もしくは過去に脱獄経験のある囚人達だけ。その中からさらに、自らの意志で希望した者だけが、今、ここで罪を償つているのよ」

「希望した？ 償つって何の話？」

ライムの声は若干うわずっていた。

卑怯な義憤がどうしようもなくわき出て止まらなかつた。自分も賞金稼ぎとして、片棒を担いでいる その罪悪感から逃れたかつた。だが逃げ場はどこにもなかつた。この囚人達と同じで。

「アナタは訊いたわよね。ワタクシは何の罪に問われたのか？ ワタクシはここにでなにをしているのか？ 答えはこうよ。”ワタクシは、人体実験をして捕まつた”。そして”ワタクシは、今ここで人体実験をしている” もちろん市の命令に沿つてやつてるんだけど、それにしても笑つちゃうわよね。捕まる前と後で、やつてることが何も変わらないんだから。だからワタクシは、ここから逃げ出す必要なんかないの」

ドクターの声も一層熱を帯び始めていた。自らの言葉に興奮を覚えていふようだ。

「ほら、この口達を見て。薬が投与されたり、身体がいじくりまわされたりしてるでしょう？ ここはただの牢獄じやない。刑期の短縮を交換条件に、自ら実験動物になるのを志願した人達の特別病棟なのよ。身体が壊れちゃつても”やり直し”がきくのが、アートマの強みよねえ。ま、殺しちゃつたらまた捕まえるのが面倒だから、残つた刑期が短い口しか殺しちゃいけないんだけど、それはそれ

平和で誰もが一定の権利を保障されている今の「」時世、人間相手の実験、データがとれる場所なんて、世界中探してもここくらいのものだわ」「

はしゃぐ子供に似たドクターの声を聞きながら、ライムは思い出していた。アリアンロッドが持つ三つの呼称　一、刑務所都市。二、アートマの都市。そして三、医療の都市。

「よくできたシステムだと思わない？　アナタ達が犯罪者を捕まえ、市はアナタ達に賞金を出す。ワタクシ達研究者が、犯罪者をモルモットにする。得られたデータから技術が発展し、市はその利潤を得る。莫大なお金の中から、またアナタ達への賞金が出される」「

戦慄がライムの背筋を走っていた。

自分もいつの間にか、循環の中へと取りこまれていると気がつかされたからだ。金の循環、経済サイクルの中へと。目眩がしていた。

アートマは、己の魂を循環させる。だがその循環すらも、もっとより大きな循環　つまり『経済』の、たった一部分でしかないのだ。

「うんざりするね。世間にこれが公表されれば」「

「もう公表されてるわよ。写真付きのウェブサイトすらあるの、知らなかつた？　たしかにつるさい輩も一杯いるけれど、結局はお金なのね。既に大きな経済圏が出来上がっている以上、変えることはできないの。だってそうでしょう？　今はもうなくなつたけれど、人々がもつと酷い搾取を受けている時代だつてあつた。主になんの罪もない子供なんかが、命と尊厳を弄ばれていた時代がね。そんな歴史が何十年、何百年と続いてきた……。それに比べたら、ワタク

シ達のやつてることなんて、たいしたことないんじゃないかしさ

「もし、この人達が廃人になつたら？ いくらアートマでも、やり直しはきかないはずだ」

ライムはなおも食い下がつた。身体の異常や破壊は、たしかに転生でやり直せるだろう。だが心が、魂が壊れてしまえば、それは言い訳のきかない非人道的行為になるはずだった。

にも関わらず、ドクターの態度は搖るぎない。

「ああいうのはね、実は魂に影響がなかつたりするのよ。」もう実験済み。ストレスやショックで脳細胞がやられても、魂それ自体はまったく傷つかない。肉体とのコネクションがうまくいかなくなつるから、狂つたよつにみえるだけなの。転生して新たな脳になれば、精神も戻る」

それにね、ヒドクターはなおも早口でまくしたてた。

「これはただの科学実験じゃない。もっと大きな、アートマの根本に関わる問いへの挑戦もあるのよ。『一ターン目のアートマ』って言葉、アナタも知つてるでしょ？」

もうこの場にはいたくない、今すぐ逃げ出したい。心の内ではそう願いながらも、ライムはその場に踏み止まつていた。

受け止めなければならぬと感じたからだ。

ドクターは一見、狂気にすら駆られていくよつに見えるが、真摯に何かを伝えようとしていた。"マッド・サイエンティストの演技をしてまで"。監視カメラの前では、直接的に言えない何かを。まるで、殺人者の刃をぐぐり抜けるよつ、被害者がダイイング・メッセージを記すよつに。

「一ターン田のアートマ……。確か、『アートマの一ターン田に形成された人格や価値観は、何度転生しても変わらない』っていう、あれのこと?」

ライムが記憶を絞り出して答えると、ドクターはボルテージをさらに上げた。

「有名な仮説だから、さすがに知つてたようね。その通りよ。でもそれが真実だとすると、困つたことになると思わない? ここにいる「達みたいに、一ターン田で反社会的な人格を作り上げちゃったアートマ達は、これからどうすればいいのかしら? 脳の異常によるものとは違う、魂それ自体が望む犯罪行為は、どうすれば再犯を防げるのかしら? ってね。刑罰が持つ二つの意義は、『犯罪の抑止』と『犯罪者の更生』。この内、犯罪者の更生が永久に期待できないとなつたら、ワタクシ達は、社会はどうすればいいのかしらん? これは、その問い合わせのための実験なのよ。人道に反するほどの厳罰を与えることで、犯罪者の魂は更正できるのかつていうね」

「言つべきことを言い尽くしたのだろうか」 ドクターは大きく深呼吸し、声の勢いを弱めた。ライムが初めて見る、優しく穏やかな表情。

「長話、しちやつたわね。こんなに喋つたの久しぶりだから、疲れちやつたわ。ありがと、最後までつきあってくれて」

大仰に礼をした後、ドクターは懐からデータディスクを取り出し、ライムの手へと押しつけた。

「おみやげよ。ワタクシからの愛を形にしたの。大事にして。でも、

けつして開けないよ」

「すうじんべ、 いらないんだけど……」

全力で拒絶を表現しようとしたライムは努力したが、どうやら無駄に終わりそうだった。

「いいからいいから、恥ずかしがらぎにい」

そう言ってライムの肩をぽんと叩くと、ドクターは有無も言わさずエレベーター方面へ戻つていつてしまつた。呆気にとられるライムへと一度だけ振り返り、寂しげな声で言つ。

「今日は楽しかったわ。本当に楽しかった……。また、会いましょうね」

それが、最期の声だった。

「 もよひなら」

そして翌日。

ニュースを知ったライムは、その日一日、嫌な予感に頭を抱えることとなつた。

ドクターが、自殺したのだ。

遺書も無く、特段の外傷も無く。

死因は、脳内物質の過剰分泌によるものではなくて、

奇天烈なドクターには似合わないほど、オーソドックスで、普通

で、平凡な、  
ただの、首吊り自殺だった。

1 - 7 (後書き)

一章終わりです。

「どうしようかなあ……」  
「それ

ドクターのディスクを手にライムは唸り、公園の生徒たちにて腰を下ろした。汗のにじむ晴天下、ディスクでおおぐ空氣すらも生温かい。

「ろくでもないものだよね、絶対。百パーセントそうだよ」

捨ててしまえとライムの一部が何度もわざやいたが、『大事にしてね』と言われた手前、そういうわけにもいかない。

「一度、中身を確かめるのはどうだ？」

そう言つてカグマが大きくあぐびをした。木陰で身体を丸め、目を何度もしばたかせている。

眞面目に話へ付き合おうとしている心意気は声から伝わってくるのだが、暑さと眠気だけはどうにもならないようだ。眞剣な口調と、だらけた表情のミスマッチがなんとも可笑しい。

「嫌だよ、ウイルスとか入つてそうだし。金庫にでも放りこんでおくかなあ」

一昨日のドクターが、ろくでもない事件か何かの渦中にいたのは、まず間違いないだろう。だからこそ首を吊つて逃げたのだ。今思えば、研究室に行く前の体内通信も、それと関連していたに違いない。

今のところ、はつきりとしているのは一点だけだった。

ライム達が、何らかの事件に巻きこまれつづることのこと。そ

れ以外の情報は無きに等しかつた。一昨日の会話でドクターが何を伝えようとしたのかも不明、このディスクが何なのかも、何故渡されたのかも不明。これでは、どう対策をとればいいのか判断できるはずもない。

「しばらくアリアンロッドから離れておく……？」

ライムの提案にカグマが首を振つた。

「いや、事情が皆目つかぬ以上、ヘタに動かぬほうがいい。ここは刑務所都市。大陸一、セキュリティが充実している場所だ。仮に何らかの犯罪が絡んでくるならば、アリアンロッド内が最も安全だろ？」

「それもそうだね」

「とにかく様子見しかないだろうな。……不確定な物事をうだうだと話してもしようがない、この話題はいつたん終わりとしよう。体調の方はどうだ？」

「ドクターから薬はもらつてたから、発作は治まつてゐる

「よし。ならば訓練に入るとしよう。万が一事件に巻き込まれたときのためにも、抵抗力が必要だ」

「了解」

ライムは背筋を正して座禅を組んだ。カグマがうつりひつらしながらも厳かに言つた。

「内容は、先程話した通りだ。最初は静かな方がいいだろう。というわけで……」

「うん、寝てもいいよ

わかつているよ、と態度で示し、ライムは手を振つてみせる。

「……うむ

その言葉を最後に、カグマはまたく間に眠りへ落ちていった。よほど眠気だつたのだろう。今まで威厳を保つた声を出していたのが、感心できるくらいの落ちっぷり。

支配率を操作すれば眠気など無視するのは容易いはずだが、カグマはよほどのことがない限りそれをしようとはしなかった。曰く、欲望は肉体からの要求であり、無理に抑え込むのは体調を崩す原因となる、とのこと。

ライムは細目で天を見上げる。陽は強いが、風の穏やかな昼過ぎだった。

巨大な自然公園。広い敷地内には、芝地や樹木などが高度な設計技術に基づいて配置されていた。いわゆる憩いの場というやつだ。といつても人影は少なかった。遠くの噴水に女性が二人、その近くのベンチにスーツの男が一人、といったところ。皆が本を読んでいるか、軽食を黙々ととっている。カップルや親子連れなどはいなかつた。他人とそういった関係を築く人種は、アリアンロッド市民のごく少数しかいない。

視線を戻すと、ライムの右手がいつの間にやらカグマの背中をなでていた。柔らかい毛の感触が伝わってくる。フワフワの、モフモフだった。

口陰にいてもなお眩しいのか、カグマは額を地につけた姿勢で寝ている。まるでお辞儀か土下座でもしているかのよ。息苦しくはないのだろうか、トライムは疑問に思つたが、丸い毛玉は風船のように膨らんだり萎んだりしているので、問題はないのだろう。

「……さて、修行修行つと

ゆるんでいた口元を引き締め、トライムも両目を瞑つた。もちろん眠るためではない。集中力を高めながら、先程カグマに言われた内容を思い出していった。

（お前も、肉体への支配率をかなり上げられるようになつた。めざましい進歩だ、私も嬉しい）

（へえ……ほめられるなんて、珍しいこともあるみたいだ。今田は」んなに晴れてるけど、明日は嵐かな。

（舞い上がるな。強くなつたから」ん、一つ、注意しておかねばならない）

もしかして、いまさら精神論でもやるわけ？

（違う。もつと実践的で重要なことだ。今日は、心臓の制御を練習する）

心臓？

（そうだ。不随意筋という言葉を知つてゐるか？ 通常、意識して動かせる筋肉を随意筋、動かせない筋肉を不随意筋という。たとえば肺や胃を動かす筋肉がそうだし、心筋も不随意筋だ）

それはわかつたけど……だから何?

(これまでのお前では、随意筋と神経の一部を任意に制御するのがせいぜいだった。だがそろそろ、不随意筋も意識的に動かせるほど支配率になつてきている)

つまり、心臓を意識的に動かして、血流を制御しようつてこと?

(違う、逆だ。誤つて心臓のコントロール権を得てしまったときのために、訓練を行う)

? “どうしてコントロールがダメなの。

(もつわかつていると思つていたが……まだまだのようだな。いいか? 私達は、自らの肉体を意識的に操作する。しかしそれは、ただ命令を与えて終わりというわけではない。たとえば歩行という動作一つとっても、ただ『歩け』一回命令するだけでは不十分だ。歩行に使われる筋肉の一つ一つへと、その瞬間瞬間に、”絶え間なく命令し続けなければならぬ”。ここまで言えばわかるな)

なるほど。心臓を動かすときも、鼓動の一つ一つをいちいち命令しなきゃならない……ってこと?

(やうだ。特に心臓は、一定のリズムを保つた鼓動が望ましい。鼓動が不定期で乱れた状態は『不整脈』と呼ばれ、身体の不調を招く)

戦闘中にメトロノームなんか持つてられないしね。

(うむ。だから今日は、いつたん心臓を制御してみるとしよう。その後、すみやかに肉体へコントロール権を戻すのだ。『わたしには扱いきれません、やはりあなたにお願いします』と言つてな)

なんだか癪に触る言い方だけど……わかつた。

ライムは心臓へと意識を集中した。

鼓動の音が明確になり、脈打つたびに全身へと血液が押し出されしていくのを感じた。心臓から生まれた『波』は、動脈を通して身体の隅々まで行き渡り、静脈を通じて心臓へと回帰していく。支配率を上げるにつれ、『循環』が強く意識されていった。様々な連想が生まれ、思考が紡ぎ出される。

ドクン、ドクン。

回る回る、血が回る。

まるで魂のように、回る。

血は肉体を回り、魂は世界を廻る。

血は心臓によって勢いを得て、肉体へと旅立つ。

ならば 魂に勢いを与え、死んだアーティマをもう一度この世へ

押し出すのは、いったい何だろう？

本来なら天へと還つていくべき使い古された魂を、新たな赤子の肉体へ押しつける鼓動は、いったい誰が打ち鳴らしているのだろう？  
何のために、自分達は

あふれ出る疑問を押しこめつつ、ライムの魂は、手のひらで心臓を包みこんでいった。ぎゅっと握つては力を抜く、その繰り返し。定期的に、リズムを保つて。血液の循環を感じとりながら。

メトロノームはなかつたが、カグマの寝息がきこえていた。穏やかで、安定した寝息。その音を頼りにすると、鼓動がとてもうまく制御できる気がした。実際、うまく制御できていた。心臓をわしづ

かみにして、思うがままに操っていた。

これが、自分の命なのだ その実感が、強くわいていた。

自分の命を、自分がつかみ、コントロールしている。安心感があった。“自分は、自分自身をどうでもできるのだ”という想いが、はつきりと形を得ていつた。

だが一方で、それは違つと叫ぶ心もまた存在していた。ドクターの声を思い出した。『一ターン目のアーテマツトで言葉、アナタも知つてるでしょ?』

唐突に安らぎがはじけ、不安が膨れあがる。  
それら全てを吹き飛ばす、外部からの声。

「お姉ちやーん! こーんにつけまー!」

ズンと背中が突き飛ばされる衝撃。

「!?. ょう……ぐ、あ、ああ……」

心臓が止まつて、死にそうになつた。比喩ではなく、文字通りそのままの意味で。

胸をおさえて鼓動と呼吸を整えよつとするハライムの耳に、パニッシュ氣味の幼い声が届いていた。

「ど、どひしたの!?. お姉ちやん? だいじょうぶ?」

誰のせいだ、誰の。

なんとか調子を整えて恨めしげに見上げた視界に映るのは、田をつるませてこちらをみつめる、幼い女の子の顔。

強い日光の輝きを背に受けて立つ、ショスの小さな身体だった。

「「めんなさい」、『めんなれ』……」

何があつたのか、自分が何をしてしまったのかもわからず泣きじやぐるシエスを慰めるように、カグマはその身体をすり寄せた。

「気にするな、君は何も悪くない。こいつが修行不足なだけだ」

尻尾で指されたライムは不機嫌さを隠さず言い返す。

「言つてくれるね。」こちは本当に死にかけたんだけど

「それはお前自身の未熟さによるものだ。声をかけられたくらいで制御を失つてどうする？ 実戦には常に不確定要素、つまり驚きに満ちているものだ。むしろ今回の件は、よい経験になつたといえるな」

シエスびいきの態度を崩さないカグマを、ライムは半眼でにらんだ。

「この口コロン猫め」

「幼子へと優しく接するのは、人道的に当然だ」

カグマは胸と尻尾をぴんと張つてみせた。本心からの言葉なのだ

「猫がそれを言つた……。もうこいや。で、あなたは何しにきたわ

け？」

気持ちを切り替えて話題をショスへと振る。なるべく怖がりせる  
ように、威圧的な声で。

「え、あ、あのね……」

齎しがきいたのか、それとも躊躇っているのか、ショスはもじもじしていた。カグマに前足で優しく触れられ、言葉を促されると、掠れて消えるくらいの小声で話し始める。

「あそんでほしかったの。ひとりぼっち、つまんないんだもん」

ショスはたゞたゞしへ言葉を紡いだ。ジーンは仕事が夜のため、この時間は寝ていること。この都市に連れてこられて日が浅いので、知り合いはないこと。ふらりと出かけたこの公園で、ライム達を見かけたこと。それでつい、はしゃいでしまったこと。

「あー……。そう。ふうん……」

一通り聞き終えた後でも、ライムの突き放した態度は変わらなかつた。

「悪いけど今は忙しいんだ。そうは見えないかもしれないけどね。だいたいさ、この前言わなかつたっけ？わたし、子供は嫌いだつて」

酒場で初めて会つたときと、同じよつてひみつけたやる。

そもそも、前回あれだけ齎しつけたのに、なおも絡んでくるのが驚きだった。人の印象は初対面で八割決まると言われているが、幼

い子供にはあてはまらないのかもしない。

「や、そうなんだ……」

ことさら厳しく言われ、シェスはみるからに落ちこんでいた。ライムとカグマの間で一瞬のアイコンタクトがなされ、互いに小さくうなずきあう。

ドクターの件がある現在、他人との関わりは極力さけるべきだつた。もし、何らかの事件にシェスが巻きこまれでもしたら面倒だ。カグマはあくまでも紳士然とした態度でシェスへと謝罪した。

「すまないな。私達にも事情があるのだ。悪いが君の要望には応えられない」

そうだ、それでいい。カグマへと意図が伝わったことにライムは満足した。ただし、その後に放たれた言葉の続きをきくまでだったが。

「だが、幼子を外に一人放つておくのも心配だ。家まで送つていこう。ほら、何をしている？ ライム、お前も来い」

「……はあ？」

いつたいどうじてこんなことになつてているのか。

頭上できちんとはしゃぐシェスがふらふら動くのを注意して肩車しながら、ライムは渋面を固定していた。自然公園からの酒場まで歩いて二十分はかかる。結構な距離だ。

「なんでわたしが、こんなことを……」

口から出した疑問にも答えは出でている。全ては、一メートル先を歩く馬鹿猫のせいだった。

「よい天氣だ。子供が建物の中にはいるのはもつたいない」

「あつち、みてみて！　ひーせんだよ！」

「うむ、よく知つているな。たしかにあれは飛行船だ」

「どうでもいいけど、あんまりじたばたしないでくれないかな……。落つこちてもいいなら、それでもかまわないけど」

ショスの指す方角の空に飛んでいる、巨大な飛行船。吊り下げられた電光板には、立体文字でこんなテロップが流れていた。  
『創立祭まであと三日！　今にも死にそうな人、これから死のうと思つてゐる人。この祭典まで、どうせなら生きてみませんか？　当田のゲストは、なんと！　大陸が誇るトップ・アイドルの』  
そこまで文字を追つたところで、ライムは馬鹿馬鹿しさに脱力して頭を落とした。

「なにあれ……」

「だから飛行船だと知つたわ。ショスでさえも知つてゐるといふのに、お前は今まで何年生きてきたんだ？」

「いや、創立祭のことなんだけど……もうここにや。なんとも言えよ、なんとでもさあ」

言い返す気力すらないライムを尻目に、ショスは人差し指を唇に

あてて疑問符をつがべた。

「ね、モーリツをこつてなーーー。」

「アリアンロッジの創立を祝う、一年に一度の祭りだな。この都市の誕生日のようなものだ」

「おおーー！ たんじょうび！」

シヒスが身体を揺らすたびに首が締められるものの、ライムはもはや何も言わない。もうどうでもするがいい、好きでいい、といった気分だった。

「シヒスもね、前のたんじょうびは、おとつせさんとおかあさんがいつしおだつたんだよ」

「ほひ。それはよーくな。今年も！」両親と 『ひさし』

カグマは言葉の途中で悲鳴をあげた。ライムの足に、尻尾を思い切り踏みつけられていたからだ。

「貴様、何を……」

噴き上がりかけたカグマの怒りも、シヒスの様子に気づいた途端、みる見る萎んでいった。

「もついないの。おとつせさんも、おかあさんも、もついないの

シヒスの声は震えていたが、笑顔を保つたままだった。強い子供だ、とライムは思つ。ジークは言つていた 色々あつて、息子夫

婦のところから引き取ったのだ、と。

「……すまない。軽率だった」

「だいじょうぶだよ。おじいちゃんがいてくれるもん。おねえちゃん」とネコさんも、してくれるもん

「わたしは別に……痛つ」

今度はライムが足を踏まれる番だった。わずかな体重をライムの足の甲一点へと集中しながら、カグマが不器用なりにも話題を変えよつと試みた。

「ところで知つていいか？ 創立祭では、^クイーン^が市民の前に姿を見せる催しがあるそうだ。彼女が表に出でるのは、一年に一度なのだそうだぞ」

「クイーン？」

子供受けがよさそうな単語に、ショスは興味を惹かれたよつだた。場の雰囲気が和わぎ、カグマの声にも安堵がにじむ。

「アリアンロッジの創立者で、現在の都市運営における最高指導者だな。要するに、女王様といつやつだ」

「すうーーー。きれいな人なのかな？」

「生憎と私は見たことがないが……ライム、お前はどうだ？」

「あるわけないじゃない。カグマに連れてこられたまで、この都市

の名前すら知らなかつたのに」

そうしてたわいもない話をしながら酒場へと送り届けるうちに、シェスは積極的にライムへと話しかけるようになつてしまつていた。幼い女の子の笑顔は、ライムにとつて不本意であり、けれど心和ませるものもあり、そして、恐怖をわき起こさせるものでもあつた。

昼寝の続きをしたがるカグマと一旦別れた後、ライムは銀行で用事を済ませた。

その帰り道でとある思いつきが頭へとうかび、市の図書館へと足を運ぶ。

(精神紋、歴史、と……)

検索ワードを内心で呟きながら、端末に向かってキーボードを叩いた。

図書館といつても、紙で作られた本は一冊も無い。専用データベースへと接続できる端末が、ずらりと並べられた建物というだけだ。あらゆるテキストが電子ファイル化された時代となつて久しい。本来なら外部端末からでもウェブを通じて閲覧可能であるべきなのだが、権利だなんだの関係で、図書館内からでないとアクセスできない情報も多いのだった。まったく、くだらないというしかない。

検索結果からのリンクを辿って情報を集めながら、ライムは思索を深めていった。

「昨日、ドクターはこう言っていた。『魂は観測できない』と。だが、実際に観測できている例を、自分達は知っているではないか。

”精神紋認証”。

これが文字通り、精神や魂に刻まれている紋様か何かを認識できる技術であるならばつまり、魂を観測できる技術であるならば。

ライムの身体の異常をどうにかするヒントだってつかめるかもしない。

さすがに図書館専用データベースだけあって、アリアンロッジやアートマ関連の情報は充実していた。そうして判明したのは、次の事実だ。

まず、精神紋認証は、アリアンロッジ創立より前に生まれていた技術だった。というより、この技術を前提として、アリアンロッジのシステムが構想されたのだという。それはそつだろう。何度も転生によつて肉体を替えるアートマ、その個人認証を行うには、精神紋に頼るしかない。そして、”個々人を識別・認証できなければ、社会は成り立たない”。あらゆる個人の権利・義務を管理するためには、『誰が誰なのか』をはつきりさせる必要があるからだ。

次に、精神紋認証の技術を発明したのは、『キング』アリアンロッジ創立者の一人である、天才科学者だつた。アリアンロッジの基礎は三人の『フェイス』、すなわち『キング』、『クイーン』、そして『ジャック』の三人によつてつくられたのだという。だが、アリアンロッジ一市民であるはずのライムすら、キングとジャックの名など聞いたこともなかつた。

検索を続けた結果、その理由はすぐに見つかつた。

二十二年前、キングが死亡し、ジャックが投獄された事件。それ以後は一人共、アリアンロッジの歴史から姿を消している。

(何が起つたんだろ？……?)

ライムがいくら検索しても、事件についての詳しい記録はみつかなかつた。

わかつたのは、キングの死にジャックが関わつており、その罪を

問われて冷凍刑に処せられたということだけだつた。冷凍刑 死刑が機能しえないアリアンロッドにおける、最も重い刑罰。”アートマ犯罪者を唯一、半永久的に社会から追放し続けるための刑”。

それにして、奇妙だ。

ジャックとの間に何があつたのかはともかくとして、何故、キングは未だにアリアンロッドへと戻つてこないのか？

アートマであるならば、死後二十二年も経過した今、転生して復帰していくものいはず。たつた三人でこの都市の基礎をつくりあげた人物だ、その情熱は相当のものだろう。たとえどんな理由で死んだにせよ、転生した後に都市をほつたらかしというのはおかしな話だ。何か理由があるに違ひなかつた。

「……くそつ」

ライムは歯噛みしていた。キングに会えれば、自分の身体について何かわかるかもしけなかつたというのに。

最近はついてない そう思つて窓の外を見ると、時刻はすっかり夜になつていた。夢中になつて作業していたせいか、時間の流れが速い。せき止められていた疲れもどつと押し寄せかけていたので、今日は戻つて寝ようと考えた。

図書館出口にある階段を、のんびりと降りている途中のこと。  
前方に立つ人の気配にライムは足を止め、顔を上げた。

階段の先に立つてライムを見上げるのは、小柄で華奢な人影。青い瞳を濡らした女性だつた。月明かりすら無い暗い路地にいても、その金髪は上品な輝きをたたえている。チングな街灯の光すら、女性を照らすためだけに作られたスポットライトにみえるほどに。

「あなた……たしか、ステーションにいた」

「『めんなさい』」

掠れて消えてしまいそうな、幻影にもノイズにも似た、女性の謝罪。

「何？ 何を言つてゐるの？ あなたは……誰なの？」

走り寄つて女性の身体をつかみたかったが、ライムの足は命令に従わず、その場に立ち去っていた。夢の中にはいるのかとも思った。五感ははつきりと機能しているのに、身体だけはどうしてもこうとをきこいつとしない、あの感覚。

「私は……謝らなければならぬのです」

「だから、何の話だと？」

「すべては私のわがままだったのです。そのせいです……本当に……『めんなさい』」

上げていた頭をゆっくりと上げ、女性は闇の中へ消えていった。金髪の輝き、その残像を、帯状に光として漂わせながら。

「……なんなんだよ、いったい」

呪縛が解けたように、ライムの身体が感覚を取り戻し始めた。自分の呼吸が荒いのを認識する。手のひらに汗がにじんでいた。意味がわからなかつた。現実から切り取られ、少しの間だけおどぎ話の

世界へと放りこまれて、今しがた帰還したばかり そんな感じ。  
異常な疲労感があつた。早く帰つて、すぐにでもベッドに倒れこ  
みたい。そう考えながら、人気のない路地を五分ほど歩いたところ  
だった。

「ライム＝アシュフィールドさんですね？」

前方に黒服の男が現れ、ライムの歩みを止めさせた。

「人違ひだよ」

ライムはリラックスした姿勢を維持しながら意識をとがらせた。  
いつの間にか後ろにも黒服が立つていて、前後を挟まれていた。自  
分の迂闊さを罵らずにはいられない。

間抜けめ、疲れていたからって油断しそぎだ。

「だからとつとど、そこを通してくれない？ 疲れてるんだ、死に  
そつなくらい。本当に、誰かを殺したくなるくらい、疲れてるんだ  
よ」

ホルスターへと向かいかけたライムの手は、黒服の声によつて制  
止された。

「シヒス＝ロスコットさんの身柄は、こちらでお預かりさせていた  
だいております。ですからあなたにも、協力的なご同行をお願いし  
たいのですが

慄懾な言葉と共に投げてよこされたそれを見て、ライムは激昂を  
押さえこむためにかなりのエネルギーを消費した。

「移動は車かな？歩くのは嫌なんだ……。少し寝たいしね。体力をためなくちゃいけない。」お前らに、目にもの見せるためのやつだ。

子供の小指が、「ロロロロと路地を転がる。

その小さな爪が反射する光を前に、ライムは黙つて両手を擧げるしかなかつた。

黒服達の行動は迅速で完璧だった。

ライムを素早く拘束し、視覚や聴覚も封鎖する。体内通信もジャミングされ、外部への連絡手段は皆無。移動に使われた車も重力素子式で、振動は無い。だから今どれだけ走ったのか、どういった地形を走ったのかという情報を、体感覚から推測することすらライムにはできなかつた。

田隠しのまま車から降ろされ、ライムはひきずるように歩かされた。

ブーツの下にあるのは土の地面。湿った風が緑の香りを運んできていた。合成された人工プラントには出せない、天然植物の泥臭い匂い。

おそらくはアリアンロッドの郊外、あるいは上層のエイル大河沿いに広がる、森林地帯のどこかだろう。近くに助けを呼べる施設などがあるかどうかは、残念ながらわからない。

扉が開かれた音の後、ショスの涙声が聞こえてきた。

「おねえちゃん……！」

ライムの田隠しが外されたのは廃屋の中だつた。小屋というより大きな物置に近い。窓には板が打ち付けられ、光源は簡素な携帯ランプしかなかつた。

ランプの横に、左手を押さえながらぶるぶると震えるショスが座りこんでいる。両足を縛られ、首にも縄が巻かれていた。まるで、リードをつけられて嫌々散歩へと向かわされる子犬のよう。

その縄の端を握り、ショスの後ろに立つ人影がいた。

「今宵は新月……月が見えなくて残念です。嗚呼、本当に残念でならない。ボク達が出会った最初の夜だ。なるべく、ロマンティックにいきたかったのですがね」

中性的な声の瘦身だった。口元を除いた顔全体が仮面に隠されている。なでつけるように流れる黒の長髪は、美しいというよりも妖艶な、いや、卑猥な印象をライムへと与えた。似た髪型のドクターとは正反対のイメージ。ようするに、最低最悪な第一印象だった。今すぐぶつ飛ばしてやりたくなるほど。

「用件は？」

ライムは单刀直入に訊いた。ショスには一声もかけない。言ひべきことは色々あつたが、今はまず、現状を開するのに意識を振り分けるべきだった。戦闘と同じ、選択と集中だ。余計なものを見て、振り回されではならない。

「いやだなあ、もつとお話ししましょうよ？ ボク、ずっと楽しみにしてたんですから。フラウ・ゲフェスの監視映像に映る貴方を、一眼見たときから、ずっとね。何かじょう要望はありませんか？ お茶の一杯でも用意させましょつか。チヨコレート・ケーキもつけたりなんかすると、とてもよろしいですかね？」 ビリビリ音

暗にドクターとの関連を示しながら、仮面野郎は舐めるような口調で言った。ナメている、馬鹿にしている、という意味ではない。言葉の一句一句が述べられるたび、ライムの中にぞつとする感覚が生じるのだ。肌を舌が這いまわっている幻覚が走るほどのおぞましい響きだった。

あの優男、次会ったときは、おぼえてろよ。

事件へと巻きこんでくれたドクターへの復讐を心に誓いながら、ライムは仮面野郎を嘲笑つてみせた。

「人とともに話したこともないの？」  
「うう、それはさ、まず名前を名乗つて、そのシラも見せなよ」

「おお、ボクの顔に興味が？」

「興味はないさ。『じつせすぐ』、ぐちゃぐちゃになるんだだからね。ただ、顔面を踏みつけたのに、その仮面は邪魔だらうから」

ライムの挑発に、仮面野郎は予想外の反応をかえした。いきなり自らの身体を強く抱きしめたかと思つと、その場でくねくねと悶えだしたのだ。

「素晴らしい……！ なんて素晴らしいんだ。まさか初対面で、そこまでしていただけるだなんて。恐悦至極、感謝の極み」

その後も意味不明な言葉をひとしきり発し、一人で興奮した後、仮面野郎はとても残念そうに額へと指を添えた。

「ですが、またの機会にしましそう。今宵のボクは、この仮面を外せないので。外したら、”ボクがボクになってしまつ”のでね。それはとても困るのです。名前も名乗れません。そもそも、ボクに名前はないのですけれども……そうですね、今宵は、ワンダラーとでも名乗つておきましょうか」

そう言つて、ワンダラーは大仰なお辞儀をした。

「呼び名がないのは不便ですからね。だつてそういう？ 貴方にはこれから、ボクのことを沢山沢山呼んでもらうんですから。」  
お願いワンダラー、助けてワンダラー、もう止めてワンダラー……  
” つてね

次の瞬間、ワンダラーの右手がひるがえった。  
いつの間にか握られていた長剣から、赤い血が滴つている。

ライムの左肩がざつくりと斬られ、勢いよく血が噴き出た。シロスが悲鳴をあげて壁際へ下がるつとするが、首繩を引っ張られて頭を床に叩きつけられてしまう。

だが斬られたライム本人は動じていなかつた。後ろ手を拘束され傷から出血しながら、それでも背筋を伸ばして立ち続けている。その様子をみたワンダラーが、刃の血を舐め取つて口角を吊り上げた。

「いけませんねえ、痛覚を遮断するのはいけません。ボク、全部わかつてゐるんですよ。『血液』と『痛み』さえあれば、再生者である貴方の傷はすぐに治る。なのにどうして、貴方の身体まだ血を噴いたまなんです？ さあ、早く痛覚を戻して、傷を治して。ご安心ください、また斬つてあげますから。ボクの剣で、今宵はほとんどん感じちゃつてください」

「……一つ条件がある」

痛覚を戻し、苦痛と熱に耐えながらも、ライムは無表情を維持した。

「その子を黙らせる。こちいち泣き止ばれるとつざりする

ライムが顎で指し示した先では、倒れたままのシヒスが身体を丸めて奥歯を鳴らしていた。その股間に中心に水溜まりが広がっている。

強い罪悪感が、肩の傷など比較にならない熱でライムの精神を灼いた。

一方、ワンドラーは心から楽しそうにシヒスを見下ろしている。

「それは、殺してもいいところお話でしようか？」

返答は、回し蹴りだった。

傍らにいた黒服の腹へとライムのブーツがめりこむ。吹き飛んだ黒服は壁へと激突し、脆い廃屋全体をギシギシと揺らした。

「自分で言つものあれだけ、あまり我慢強くはないんだ。ユーモアのセンスもない。ジョークは通じないから、気をつけてほしい」

蹴り足をゆつくりと戻すライムを見ながら、ワンドラーは狂ったように両手を叩いた。

「いいじょう。ええ、いいじょうとも！ 愛する貴方の頼みです、これをどうして拒否などできまじゅうか」

長剣の鞘が弧を描き、シヒスの首をしたたかに撃つた。気絶したのか、か弱い幼女の身体はぴくりとも動かなくなる。

ワンドラーはもはやシヒスに田もくれず、ライムへと近づいてその顎をなぞるようになでた。

「さあ、これでもう我慢は要りません。我慢強くはないのでしょうか？」思ひ存分叫べます、泣き顔も披露できるじゃないですか！ 今

宵は長い、時間はたっぷりあります。ボクにきかせてください。貴方の喘ぎを。嫌でも感じてしまつ、肢体の震えを」

「……くわつたれめ

ライムは唾を吐きかける。仮面についたそれを、ワンドラーは長い長い舌で、じっくりと味わいつゝ舐め取つたのだつた。

絶叫が廃屋に響き渡つていた。

もしシェスに意識があつたなら、きいただけで気絶するか、心が壊れてしまつたかもしない。それほどに壮絶な叫びだつた。

「ドクターから受け取つた、ディスクはどこに?」

「銀行の、貸し金、庫に、入れた」

拷問はワンドラーの宣言通り、とても長く続いた。

「中のデータは見ましたか?」

「見て、な、い。あつ……あああああああ……」

ワンドラーはライムの身体のあちこちへと、長剣を突き刺していった。

そう、本当に色々なところへと 突き刺し、突き入れ、突き破つた。

「ディスクにプロテクトはありましたか?」

「知らなあ、い、……あ、あ、知るわけ、ない! ディスクには、何も触れてない!」

刺し方も様々だつた。素早く何度も突いたり抜いたりを繰り返す時もあれば、刺し入れた後の刃を捻つて、ライムの肉体をドリルのように削ぎ落とし続ける時もあつた。

このときばかりは、再生能力が完璧に裏目となっていた。刃が肉体へと侵入するたび、再生しようとすると細胞がすぐにまた斬られ、“新鮮な痛み”を絶え間なく生み続けた。

「ディスクにプロテクトがかかっているとしたら、その解除方法に心当たりは？」

「知、らない……」

ワンダラーの質問は次第に、ライムにとつて全く憶えのない内容へと移つていった。

答えられないのがそもそも当たり前だった。ライムがドクターと話すのは、いつもフラウ・ゲフェス内でしかなかったのだ。会話内容は記録に残つていてははずだから、ワンダラーがそれをきいていいはずがない。つまり、ワンダラーが既に知っている事柄しか、ライムはドクターから知らされていないのだ。

にも関わらず拷問を続けるのは、念のための確認、そして単なる娯楽なのだろう。ゲス野郎め。

「では、ニルヴァーナについて、何か心当たりは？」

「何だよ、それ……。きいたことも、ない」

不幸にも、あるいは幸運にも、ライムの意識は朦朧としていた。傷も治らなくなつていて、肉体から血が失われすぎたせいで、痛覚の有無に関係なく、自己再生能力が機能しなくなっているのだった。

髪をつかまれ、何度水をかけても、ライムの瞳は焦点を取り戻そうとしなかった。その様子を見たワンダラーが、大仰に頭を抱えて名残惜しさを表現する。

「嗚呼、残念ながら時間のようですね。幸せの魔法が解ける……馬車はカボチャに、白馬はネズミに。輝くドレスは破れ、娘はみすぼらしく倒れる。ガラスの靴は、どこにもみあたらない」

ワンドラーの声が、そして痛みが、夜の向こうへと遠ざかっていった。服と肉体をぼろぼろにしたまま、倒れ伏したライムは瞳を閉じ、気を失った。

。

真っ白な世界。

(ライム……ああ、ライム……)

誰かが、泣いていた。

自分の名を呼びながら、泣いていた。

(どうしてあなたが……そんな、神様)

白いスクリーンが、泣きわめく女性の像を映し出す。そこでライムは思い出した。

この人は、自分の母親だ。

自分の、一ターン目の母親だ。

泣かないで、母さん。

一ターン目、一十歳になるまで後一ヶ月 原因不明の病に冒され、死ぬ間際となつた自分が、こう言つたのを憶えている。本心から言葉だった。母には泣いてほしくなかつた。自分などのために。父も母も、ライムのために大陸中を駆けずり回り、色々な医者を

探してくれた。名医と呼ばれる人々すべてが首を横に振つたが、両親は諦めなかつた。最期の最期まで。そのために、どれだけ生活が苦しくなろうとも。

世界は、愛に、『想い』に満ちている。

両親だけではなかつた。多くの人がライムを想つてくれた。それは愛であつたり、親切であつたり、友情であつたり、ちょっとした気遣いだつたりした。個々人に差はあれ、みんなが他人のことを想つていた。

だからこそ、怖かつた。

”誰かに想わることは、ただそれだけで、その誰かの人生を破壊しうる”。

想いが深ければ深いほど、強ければ強いほど。徹底的に、容赦もなく、心も身体も、何もかもを、粉々の台無しにしうる。

一ターン目の死に際に、両親の顔を見て ライムが学び、魂に刻みつけた真理は、まさにそれだつた。

もし、この人達の子供がわたしじゃなかつたら。  
もし、この人達がわたしを愛していなかつたら。

この人達は別の、もっと幸せな人生を送つていただろう。娘の死を、嘆き悲しむこともなかつただろう。

(しないで )

呼びかけがきこえていた。泣きながら、自分へとすがりついている声が。

(しないで！　いやだよ、こんなの)

だまれ……！

ライムの魂が頭を抱え、苦しみに首を振った。やめてほしかった。自分のために、自分なんかのために、無駄な涙を流すのは。世界の白が転じ、黒へと変色していく。それは現実の色だ。現實に満ちる色は、いつだって、圧倒的なまでに、白でなく黒。意識が否応にも覚醒し、おそるおそる、両目を開いた。

「おねえちゃん！ しないで、おねえちゃん！」

「つむ、さ、い……」

血液不足からくる頭痛に手をあてながら、ライムは上半身を起こした。頭痛だけではない。あちこちから痛覚信号が電流のように走つてきていた。拷問の傷が再生されずに残っているのだ。どうせ血液が足りていないのでからと、支配率を操作して痛みを消す。

胸へと泣きすがつてくるシェスの様子をまず確認した。

左手の小指があつた箇所には包帯が巻かれているが、命に関わるものではなさそうだ。他に傷も見当たらない。

ひとまずシェスを無視し、急いで現状把握に努めた。

自分自身の状態　傷だらけはあるが、動かせないほど酷いダメージは無い。拘束は両手に手錠のみで、他は自由。

ドクターにもらった薬がきて発作が再発しないかが心配だったが、今のところ問題はなさそうだった。ドクターの仮説を信じるならば、発作は再生能力の暴走によるものなのだから、血液が足りてないうちは大丈夫なのかもしれない。

現在位置は廃屋の中だった。自分達二人はまだ閉じ込められているようだ。他に人間はない。ただ、外には人間が歩き回っている気配があった。おそらく一人。見張りの黒服だろう。

小屋の中は相変わらず暗かつた。エネルギーが切れかかっているのか、ランプの光が時折明滅している。

夜明けまで、後どれくらいだろう

窓を見たライムは、そこで

若干の驚きをおぼえた。

「あれから、どれくらい経つた?」

打ち付けられた板の隙間から、ほんの少しではあるが、赤い夕陽が射しこんでいた。ライムが氣絶したのは夜。つまり、それから最低でも半日以上は経過しているということ。

「わからないよ。シエスも、さつきおきたんだもん」

涙を徐々に収めながらシエスは答えた。しゃくりあげていた呼吸のリズムも、正常へと戻りつつある。ありがたいことだった。あのままずつと泣きわめかれていては、今後の行動に支障が出ていたところだ。

ライムは壁際へと寄りかかり、頭の中で現状を整理した。

ワングラー達の正体はわからない。今のところ、フラウ・ゲフェス内のデータを閲覧できる立場か手段を持つているということしかわかつていなかつた。タイミングからして、あの金髪の女性と関連があるのは明らかだつたが、これも詳しいことはわからない。

なんにせよ問題は、自分が、そしてそれ以上にシエスが今後どうなるか。そして、自分は今後どう動くべきなのかということだ。

まず、自分達一人がすぐに殺されることはないはずだった。ワングラー達の狙いは、第一に例のディスクだろう。そしてディスクは、アリアンロッドが運営する銀行の貸金庫にある。あの金庫を開けるには生体認証を何種類もパスしなくてはならないから、自分がすぐに戦われるとは考えづらい。

同様に、シエスの命もしばらくは保証されるはずだった。金庫を開けられるのは自分だけだから、シエスの身柄はディスクとの交換にでもなるのだろう。もちろん、交換というのは建前に決まつ

てこらのだらうけれども。

ライムは唇を噛んでなおも考える。

残された時間は少ないはずだった。ワンダラーが戻ってきて、取引を持ちかけてくるまでが勝負だ。もし取引が始まり、ディスクを渡してしまえば、少なくともシェスは確実に殺される。

外部からの助けは期待できないと想定するべきだった。カグマやジーンが異変に気づいたとしても、彼らがこの場所を特定できる確率は高くない。取引で自分が金庫へと赴いたときにならば機会もあるが、やはり不確定要素が多い。

今のはしご、二人で脱出するのがベスト。

思考をまとめたライムはシェスへと向き直り、真っ直ぐに視線を合わせ、宣言した。

「はつきつせせておいつ。あなただけは、必ず家へ帰す。それだけは誓うよ。わたしが事件に巻きこんだんだ 責任は取る。この命に代えても」

本心ではあつたが、あくまでシェスを安心させるための宣言だった。しかしそんなライムの意図と逆に、シェスは激しく泣き出してしまう。

「いやだよー そんなこといわないで」

「うふふと、ううして泣くの」

「おとうさんも、おかあさんもしんじゅつた。もうこやだよ。だれにも、しんじほしくなんかなこよー！」

シエスの叫び。子供らしい真っ直ぐで純真な、『想い』。  
なんて美しく、そして恐ろしい。

本来なら、優しい言葉で慰めるべきだったのだろう。適当に言い含めて、とりあえず泣き止ませるのが最善だったのだろう。

「……黙れよ」

だがライムには、それができなかつた。

乾いた音をたて、ライムの手のひらがシエスの頬をはたく。

「いい加減にしてくれ、もううんざりしてるんだ！ いい？ わたしはアートマだ。生まれ変われるんだ。死んだつてたいしたことじやないんだよ。……わたしは、全然平気なんだよ」

子供相手に何をやつているんだ ライムの心の一部が呆れかえつていた。

だが止まらなかつた。どんなに支配率を上げても、唇と舌と肺を制御しても、怒りに震える言葉は一語一句はつきりと発音され続けた。

どうしようもなかつた。肉体の制御は重要じゃなかつた。

魂こそが問題で、そこにはルールがあつた。

絶望的なルール どれだけ訓練を積んだアートマであつて、

”魂それ自体”に対する支配率だけは、上げられない。

「だから泣くな。わたしを哀れむな。反吐が出るんだよ、些細な物事で大げさに騒がれるとさ！ あなたはとにかく、黙つて静かに、わたしを利用して逃げ出すことだけを考えればいい。オーケー？」

シェスはおそらく利口で辛抱強い子供だった。泣くのをピタリと止め、無言でただうなずいたのだ。幼い子供の毅然とした態度を前に、ライムの熱は急激に失われていった。自分が情けなくなり、居心地の悪さを感じた。声が尻すぼみになつた。

「と、とにかく、まずはここを出るよ。後ろ向いてて

両手に力をこめ、ライムは手錠の強度を確認した。破壊は不可能のようだ。

ならば。  
部屋の隅へと歩いて足に力をこめ、床板を音もなく踏み抜いた。木の板が鋭利な断面を晒す。その断面へと、ライムは左手の親指の付け根を当て、のこぎりの要領で動かし始めた。

痛みは消しているが、自然と奥歯に力が入つた。異物が自分の肉体へと侵入していく感覚だけは、慣れることができそうにない。切断作業は難航した。出血を防ぐため、筋肉を限界まで収縮させているせいだろう。

皮と筋肉ゾーンをやつとのことで抜け、骨を「ゴリゴリ」と削つていく段階になつたところで、背を向けているシェスが両耳を塞いだのが見えた。音が大きすぎたかと思い、静かな作業を心がけることにする。

ようやく作業が終わり、親指が根本から切断された。

あやうく断片を床下へと落としかける。寸でのところでキヤッチし、ポケットへと突つこんだ。このパートを失うわけにはいかない。後でつなげられるし、”用途は他にある”。

親指のない左手が手錠から抜け、両手が自由を取り戻した。次の問題は外の黒服二人だ。廃屋の壁や扉など蹴破ればいいだけだが、黒服達にも対処しなければシェスを逃がせない。

熟考している時間はなかつた。手段を選んでいる時間も。

「古典的だけど、まあいけるか。シェス、こいつにきて」

左手を後ろに隠しながらライムは手招きした。シェスは素直に、しかし怪訝な表情をうかべながらライムへと近寄る。勘のいい子だとライムは胸の中だけで同情した。

「目を瞑つて、胸をおさえて。わたしが言つまで、そのままでいること。絶対動かないでね」

シェスが言われた通りの体勢になつたのを確認すると、ライムは左手の切斷面を向け

血管を圧迫していた筋肉の収縮を、一瞬だけ解いた。

噴出した大量の血がシェスの胸元を染め、すぐさま止められる。

「誰か！ 誰か来て！ この子が血を吐いた！」

両手を後ろに隠して未だ拘束されているフリをしながら、ライムはヒステリックに叫んだ。シェスは従順に言いつけを守っている。さすがに呼吸は荒ぶつていて、逆にいい感じだ。

黒服が二人とも突入してきた。血まみれのシェスを見た彼らは迅速に行動する。一人はシェスに向かい、もう一人がライムへと銃を突きつけてきたのだ。隙がない。今のところは。

「！？」

シェスに触れた黒服が、背後へと反射的にずり下がつた。シェス

の胸元から、何かが転がり出てきたからだ。

切りたてホヤホヤの、人間の親指。

視線を向けてしまったのだろう。ライムへと向けられていた銃口にもブレが生じた。

刹那にも満たない、けれど充分すぎる隙。

次の瞬間にはもう、トリガーにかかっていた黒服の指がへし折られ、代わりにライムの右手へと銃が握られ、銃声が鳴り響いている。シエス担当だった黒服が、こめかみを吹き飛ばされて倒れた。銃口をもう一人の額へと押しつけながら、ライムは口角を吊り上げる。

「古典的でも、シンプルでも、ありがちでもなんでもいい。だまし合いに必要なのは一つ リアリティ。ただ、これだけだよね」

一度目の銃声も滞りなく鳴り響いたが、ライムにも余裕はなかった。リアリティの代償として、貴重なリソースを消費してしまっている。

血液は、もう、残りわずかしかない。

廃屋の周囲は見渡す限り林しかなかつた。

シェスを背負いながら、ライムは木々の間を飛び移つて逃走する。まるで忍者にでもなつた氣分だつた。

銃を奪えたのは幸運といえた。廃屋を出た後、すぐに他の黒服が追手として現れたからだ。

「さて……どうするかな、つと」

貧血状態の身体を無理矢理動かしながら、ライムは意識的に笑つてみせた。

同じルートを追走してくる黒服達も問題だつたが、どちらへ逃げればいいのかわかつていなのが何よりもまずかった。ここがどこなのかすら皆目わからない。夕日の位置から推測してとりあえず西へ向かつてはいるものの、この先どうなるかは完全に運任せだつた。

後ろから追手の銃弾が飛んできていた。そつとう当たらぬ距離。

だが段々と追いつかれてきていた。幼子一人分のハンデは重い。

ライムは親指のない左手でシェスの首根っこを器用につかみ、小さな身体を自分の胸元へと移動させた。目を合わることなく大声で呼びかける。

「しつかりつかまつて！ この左手じゃ、いつ落としちゃうかもわからぬ！」

背中に回されているシェスの手に力がこもり、顔がライムの胸へと埋められるのがわかつた。

軋む枝のしなりを最大限に使ってライムは跳躍した。空中で姿勢制御し、半身だけ振り返つて銃口を背後へ向ける。

追手は三人。ライムの放った弾は五発。

三発は黒服のそれぞれを狙い、はじきとばされた。それこそ狙い通りに。

残り二発が、黒服達の着地地点、つまり飛び移ろうとしていた枝を根本から叩き折った。予定していた足場を突然失い、二人がバランスを崩して落下。レースから脱落していった。

追手は、残り一人。

きわどいな。

なおも逃走を続けるライムの顔は青ざめ、動悸は異常に速まり、呼吸も荒くなつてきていた。

酸素が足りない、養分が足りない。それらを運ぶ血液が足りない。こればかりは支配率をいくら上げたところでどうしようもなかつた。疲労感は消せても疲労は消せない。どれだけ辛辣に命令しようと、エネルギーがなければ肉体は動かないのだ。

それでも無理を言つてしまつのが、命令できる立場にある者の性というやつだつた。

血液が足りない？　だからどうした。

”足りなくともなんとかしろ”。

少ない血液を使いまわせ。勢いよく循環させろ。そうだ。心臓を打ち鳴らせ。もっと鼓動を。心臓の鼓動を。

ドクン、と一際大きな雄叫びがきこえた。

しまつたとライムが後悔した時にはもう遅い。

「う……あ……」

心臓の自律的脈動が、止まつた。

オーバーワークに耐えきれなくなつた心筋が、自らの制御をライムへと明け渡していた。もう自分は知らない、そんなに言つならお前がやれとでも言つよつに。無理に支配率を上げすぎた結果だつた。

宙にいた身体がバランスを失う。  
シェスの悲鳴がきこえていた。

突如として課せられた心臓制御というタスク。ライムの意識、そのスループットの大半が、心臓へと割かれることになつてしまつた。他の肉体の制御が疎かになる。適切な命令が下せなくなる。今まで完璧にかみ合つていたはずの筋肉群、その連携が崩れる。

赤く明滅する視界。

黒服の笑みが、目の前にまで迫つてきていた。

この時 もし、黒服が発砲していたら。ライムは抱えたシェスごと、成す術なく撃ち抜かれていただろう。  
だがそれはならなかつた。

ライム達二人はあくまで『誘拐された人質』であり、出来る限り殺さず捕らえたいという思惑が、黒服にはあつたのかかもしれない。その思惑、いわば欲張りこそが、黒服の不用意な接近を促した。手を伸ばせば互いに届く距離への接近を。

黒服の右手がライムの首根っこを捕らえたのと同じように ライムの右手もまた、黒服の頭部をがっちらりとつかんでいた。

空中での取つ組み合い。

樹木の太くがつしりとした枝が、すぐそこまで迫ってきていた。

激突する。

ライムの身体は制御の安定を取り戻しつつあった。カグマの指導がさつそく効果を發揮した結果だ。

それでもまだ一般人並みの筋力しか出せない それだけで充分なのだけれども。

黒服の頭部を起点として身体をひねり、ライムは逆立ちの姿勢を固めた。左手はシェスをしつかりと抱いている。

後はただ維持するだけだった。この体勢。自分とシェスと黒服、三人の形と配置を。

一人分の叫びが轟いていた。シェスの恐怖と、黒服の驚愕とが。

そして驚愕の叫びは、頸椎の碎ける乾いた音によつて途絶える。

黒服の顔面が枝へと叩きつけられ、固い樹皮へと熱烈なキスをかわしていた。

上方からはライムの体重、下方からは黒服自身の体重がかけられ、支点となつた顔面にはすさまじい力がかかつたはずだった。痛みを感じる暇も無く避けたことだろう。

タコのように首を折り曲げた黒服から手を離し、葉の積もる地面へとライムは着地した。シェスの無事を確認し、大きく息を吐く。黒服の死体が遅れて落下し、どすんという音でシェスを飛び上がらせていた。

傍らで横たわる死体のように、静かで冷たい夜だった。空にも雲一つ無い。

こんな美しい夜でも、人は死ぬのだ。容易に。造作もなく。

そんな想いが、ライムの頭をふとよぎった。

木の幹に背を預けて一度座りこみ、聴覚の支配率を引き上げた。ライム達にとって都合のいい音と悪い音が、それぞれ遠くから聞こえてくる。

いい音は、巨大な流水の音。悪い音は、追手が走つてくる音。

「あっちだ、先に行つて。急いで」

音から推測した川下の方角を指せし、ライムは胸を押されて肩を大きく上下させた。  
すぐには動けそうになかった。  
これはもう、賭けにでるしかない。

「たぶん、あっちがエイルの下流だ。地理を考えると、ここはアリアンロッジ上層……ずっと南に進めば、いつかにかの施設に辿りつけるかもしれない。川沿いは進んじゃダメだ、奴らに見つかるからね。林の中を、隠れながら進むんだ」

「おねえちゃんは？」

シロスは不安に満ちた声で訊いてきた。不安といつても、シロス自身の安否に対するものではなさそうだった。予想通りではあったが、その反応にいい加減ライムはうんざりしていた。

「すまないけど、まだやることがあるから、ここに残る」

「じゃあシロスも  
「はやく行け！」

有無をいわむずライムはショスの類をひとつたいた。さつきよりもさらに強く、より痛い叩き方で。

時間がない、無駄な問答をしている余裕はなかつた。そしてこういつ時に効果的なのは、言葉でも理屈でもなく、暴力と恐怖なのだ。

「死にたい？　これよりもっと痛い目にあいたい？　嫌だよね。怖いよね。ほら、怖いなら急げ！　尻を叩かないと走れないのか？　なんなら、わたしが蹴つ飛ばしてやるうつか？」

ライムは表情にスゴ味をこめた。半分は演技で、もう半分は本心からの怒りだつた。

”ライム自身への怒り”。情けなかつた。自分にもっと力があれば、あるいはもっと用心深ければ……。

だがうじうじと後悔できるほど贅沢な状況ではなかつた。自省よりも先に、今はやれるだけのことをするべきだつた。もし必要なならば、本当にショスの尻を蹴飛ばすべらごのことを。

だが今になつてショスは、素直だとこつものを林のどこかに落としてきたようだつた。

「どうして、ショスにだけそんなつめたくするの？」

「だだをこねるでもなく、かといつてしまふつあげるのは止められないまま、発せられた問い。

「おねえちゃん、ほかの人とはこいつぱいおはなししてゐるの。ネコさんとも、おじいちゃんともおはなししてゐるの。－ どうしてショスにだけ、そんなひどいこといつの？ ショスがこどもだから？ こどもだから、ショスのこときらいなの？」

「そんなこと今はどうでも　　」

「こたえて！」

今までには考えられないくらい強い調子で、ショスは詰問してきた。真剣な眼差しだつた。

「……そつぞ、あなたが子供だからさ」

ライムはとつさにそつ答えてしまつていた。失敗だつた。無駄な会話に付き合つてゐる余裕はない 理知的な『意識』はそつ判断していた。だが『魂』はそつではなかつた。熱せられた言葉が、制御しようもない勢いで、次から次へと口から流れ出でていた。

「好きとか嫌いとかどうでもいいんだよ。大事なのは、互いの利益になる関係かどうか。これがすべてだ。カグマはわたしに戦いの知識を与えてくれる。ジーンはわたしに美味しい料理を出してくれる。わたしはその代価として、彼らに金を出す。だから一緒にいるんだ。お喋りとか馴れ合いは单なるオマケさ。そういう関係、ギヴァンドテイクなんだ。 そつあるべきなんだ。』 そつじやなきやいけないんだ”

冷徹な表情をつくり続けるのは困難を極めた。おそれく、支配率を上げられなければ不可能な芸当だつたはず。

一方で、吐き出す言葉の内容はちつとも冷静ではなかつた。感情的な話だつた。子供相手にする話でもなかつた。普通の幼い子供になら、話しても伝わりはしなかつただろう。

だが、ショスはいわゆる『普通の幼い子供』ではなかつた。

「なら……ショスとも、そつこうかんけーなら、いいの？」

「ライムは『悪いながらもペリペリと葉を吐き出す。質より量とでもこいつよひ』。

「まあ、それができるならね。けど出来ないだら? たかが子供に。あなたが、わたしに何を『与えてくれる? わたしになんのメリットがある? さつきも言つたけど、今あなたを助けているのは、あくまで今回の件がわたしの責任だからだ。責任は取る。借りは必ず返す。それを実行しているだけだ。それ以上の関係なんて、結びようがないね」

声の震えをおさえのにもかなりの支配率を必要とした。ライムの視線は落ち着きなく移動している。

何かがおかしかった。泣かせている側と、泣いている側。怯えているのは、普通、泣いている側のはずだ。だがこの場では逆だった。シェスは少しも怯えてはいなかった。ただ、悲しがっているだけで。怯えているのは、シェスの真っ直ぐな瞳に怯えているのは、泣かせている側であるライムの方だった。

シロスはなおも懸命に切りこんでくる。

「じゃあ、シロスともじょひ。シロスとも、『けーやく』じょひー。」

「は? 何を言つて?」

「シロス、ちゃんととにかく。ひとりでも、ちゃんととにかく。だからおねえちゃんも、ちゃんととかえつてきて。ぜつたに……ぜつたに、かえつてきて。シロスとやくして。うつそ、シロスと、けーやくして!」

突然の申し出が、夜の中に静寂を蘇らせた。

ライムの頭にあるのは、混乱に似た思考の錯綜。あるいは各自が自己主張する感情の交錯。

シェスは幼い子供ではなかつた。少なくとも、三ターン目に入したライムよりずつとずつと、賢く、強い人間だつた。その瞳へと、その想いへと、ライムの魂は惹かれ、同時に恐怖を覚えた。

誰かに想われることは、ただそれだけで、その誰かの人生を破壊しつる　かつて魂に刻んだ文句がうかびあがつてきた。

それこそが恐怖の源だつた。

”ライムにとつての、一ターン目アーティマだつた”。

既に形成されてしまった不文律であり、変えることのできない呪縛だつた。

事実、ライムさえいなければ、シェスは誘拐などされなかつたのだ。

だが同時に、この場には『言い訳』もまた存在していた。きっかけを与えたのはシェスだつた。この小さく幼い女の子が、ライムへと恐怖を与える、そして同時に、その恐怖を払うための切り口を作り出してくれた。

「ダメだね。そんなんじゃあ、全然だめだ。話にならない」

ライムは両目を瞑つて首を振り　そして急に、何かが弾けたかのように、笑いだした。

「そんな条件はのめない。契約するならこうだ。あなたは、ちゃんと逃げるだけじゃなく、”ちゃんと生きて帰る”。それを約束でき

るなら、考えてあげてもいい」

シェスの泣き顔に、雲が晴れたような笑みが射しこんだ。

「うんー、やくそくするー。」

「じゃあ、契約成立だ」

ライムはシェスの頭をくしゃくしゃとなでた。

契約。それこそが言い訳だった。

ビジネスライクな関係を結ぶこと。ギヴァンドテイクの関係を結ぶこと。互いの想いなど無くとも、問題なく成立する関係を結ぶこと。

それこそが、共に在ることを許される欺瞞。魂が決めたルールの、隠された抜け道だった。

「さあ、行つて。そして、わたしを待つていて。必ず戻る。必ず、あなたの元へ帰るから」

そう言われたシェスは少しの間ためらつた後、ぎこちなくも微笑み、林の奥へと駆けだしていった。決して振りかえらずに。その後ろ姿には覚悟が感じられた。待ち続けるという覚悟が。

そう、シェスがライムへと提示した条件は、『シェスの元へと帰ること』だった。いつまでに帰るかの指定はない。シェスは現状をよく把握していた。だからわざと指定しなかったのだ。

明日までも、一週間先でも、あるいは、十年以上先でも。いつになるかはまだわからなかつた。それを決定するのは、これからライム次第だ。

「けどまあ、出来れば明日には帰りたいな。契約の履行なんて、早いにこしたことはない」

立ち上がり夜空へと発砲し、ライムはシェスの消えた方向の反対側を見た。

銃声に引きつけられた追手達の姿が、遠く、けれど確実に、視界の中心へと入りこんできていた。

音がする。

骨の軋む音がする。筋肉のひきつる音がする。血管の掠れる音がする。

限界の近づく、音がする。

なんとか逃亡を再開しつつも、ライムは「」のコニッシュトを自覚していた。

脚の筋肉が動作不能に陥るまでそういう長くはない。絶対的にエネルギーが不足していた。精神力だとか、気合いでどうにかなる問題ではない。

そもそも、一般にいう『精神が肉体を凌駕した状態』を意図的に起こす技術が、すなわち支配率の上昇なのだ。それでどうにもならないくなれば、もはやどうしようもない。

だが希望はあった。ライムの逃げる先にある激流 大いなるエイル大河が。

そこに飛びこめれば、あるいは逃げ切れるかも知れない。  
明日にでも、ショスの元に帰れるかも知れない。

もちろん危険もあった。エイル川は広く、流れが速く、そして深い。今のライムが一度でも水流に捕らわれれば、自力で抜け出すことはできないだろう。その上、流された先にあるのは、高度百五十メートルに達するアリアンクロッドの滝だった。滝壺に飲みこまれて生き残りきる確率は、低いといわざるえない。

それでも他に手段は無かつた。ゼロパーセントでないだけ、まだマシというものだ。

なんとか黒服達には追いつかれないまま、ライムは最後の枝を使って大きく跳躍した。

林を抜け、視界がひらける。

眼下にあるのは美しいエイルの流れと、丸石の敷き詰められた河原 そして、川辺に立つ人影が一人。

「いけませんねえ、姫。ええ、いけません。そんなにおいたが過ぎると、ボク」

長剣を抜いて待ち構えていたワンドラーが、軽やかに飛び上がった。川へ向かうライムの軌道へと割りこんでくる。

「ボク、我慢できなくなっちゃうじゃあないですか」

空中で、二人は対峙した。ライムは上。ワンドラーは下。

「どつ けえええええ！」

ライムの右手から弾丸が乱れ飛び、ワンドラーの長剣に造作もな  
くはじかれた。二人の距離は瞬く間に縮まっていく。

このままじゃ勝てない。雄叫びをあげながらもライムの判断  
は冷静だった。

ワンドラーは強い、身のこなしを見ただけではつきりとわかるほどに。無論、ライムにとつて戦闘に勝つ必要はなかった。川にさえ飛びこめればいい。だがこのままだとそれすらも不可能に思えた。

もうりん、あきらめるつもりも毛頭ない。

交錯の直前、ワンドラーの構えから剣筋を予測し、ライムは右腕を真っ直ぐ突き出した。

激突。

煌めいた白刃が火花をあげて銃と接触した。金属の悲鳴を鳴らしながら、銃身がものの見事に斬り裂かれる。

刃はそのままライムの右腕へと進行していった。親指と人差し指の間を分かつて、手首を割り、前腕を裂きながら肘を経由して上腕へと向かっていく。だがこの剣撃の威力ならば、致命傷は避けられると予測できた。

右腕を捨てる 激突前、ライムは迷いなく決断していた。思考ではなく直感の判断だった。

そしてその直感は正しかつたように思えた。心臓に到達していたであろう長剣の太刀筋を、肉と骨の抵抗が逸らしつつあつたからだ。このままいけば胴体は無傷で済むだろつ。実際のところ、人体というものは、驚くほど斬りづらいものなのだ。

晴れ渡つた夜空を反射して煌めくエイルに、希望の光が見えかけた その時だった。

「ほうら……我慢できずに、膨らんできちやつた」

ワンダラーの囁きと共に、その両腕、いや上半身が驚異的に膨張し、長剣が威力を増した。

「！？」

ライムの両目が驚愕に見開かれ、長剣の軌道が容易く修正された。直線的な軌跡がライムの右手を縦割りにスライスし、そのまま胸部も切り落す。

肺が容赦なく横なぎにされ、割れた水風船のように血が噴き出した。ぱっくりと裂けた乳房。からうじて無事だった心臓が鼓動し続

けながら露出しているところへ、ワンダラーの右手が突っこまれ、握りこまれ、そして引き抜かれた。

「憶え、てる、よ」

捨て身の策すら打ち砕かれた敗者の、しわがれた捨て台詞。完全に力を失って落下しながら、ライムは今や上下関係の逆転したワンダラーを見上げ、左手の中指を突き立てた。

「次……は……負けな、い……！」

それを見たワンダラーが、嬉しそうに空中で身体をくねらせた。

「お待ちしていますよ。楽しみに、本当に楽しみにね」

その右手の上では、未だ脈動するライムの心臓が、ちぎれた血管をぶら下げている。

ライムの身体はエイル大河に落下し、そのまま激流へとのみこれまでいった。

冷たい水が口と傷口を翻りながら侵入していく。肺が瞬く間に満たされ、空気が残らず吐き出された。残りわずかとなつた血液と体温が、とめどなく流れ出していく。

肉体は時折川底を擦りながら、勢いよく河を下つていった。

（帰るのは、ずいぶん先になっちゃうな……）

申し訳なく思いながら、ライムはシェスの顔を思いつかべた。無事に逃げられただろうか。もしあの子が無事で、次に会えるとしたらあの子は、どんな大人になつているだろうか。

懐かしい感覚が、蘇つてきていた。

それは無の感覚だった。

現実の五感が消えていく感覚。

周囲が消えていく感覚。

ライムの魂にとっては三度目となる、肉体が死へと向かう感覚だった。

もはや慣れっこになつた、真っ白な世界。

怖くはなかつた。ただ、悔しさがあるだけ。それとほんの少し、カグマが今どうしているかが気になつたくらい。

走馬燈は流れなかつた。そんなものは過去にも見たことがない。きっと、フィクションの中でしか見られないものなんぢやないだろうか。

(ライム……ああ、ライム……)

自分の意志に關係なく白のスクリーンへと映るのは、いつだつて、予想通り、一ターン目の最期に見た両親の顔だ。眠つている時の夢にすら出てくるシーンだから、なんともありがたみが無いなと思う。それは結局、睡眠と死の間に、たいした違いが無いということなのかもしれない。目を瞑り、意識を失い、夢を見て、目覚める。その程度のものなのだ。アートマが死ぬということは。

それなのに。

それなのにビリッとして、こんなにも泣きたくなるのだらつへ。

わずかに身体へと残っていた五感が、大きな浮遊感をとらえた。肉体が滝へと到達し、落下を始めたに違ひない。

落ちていく。

肉体が滝壺へと落ちていく。いや、かつては肉体だつた肉塊が落ちていく。

やがて全ての感覚が消え去り、自分が落ちているのか、浮いているのか、それとも昇っているのかすらわからなくなつた。

魂が立つ、この場所は白い。ここがどこなのか知る由もないが、天国でも地獄でもないことだけは確かだつた。それらの場所へ行ける権利が、アートマには与えられていない。

白の一部が切り裂かれ、黒が浸食を開始してきた。たっぷりとせたクリームをつづいたら、下からコーヒーが出てきて混ざりうとしてくる、あの感じ。ブラックは嫌いだつた。コーヒーも、そして人生も、甘いにこしたことはない。

黒が白を喰らいつぶくし、世界が変わつた。いや、世界に戻つてきたのだ。

赤子特有の曖昧な五感が蘇つてきていた。肉体の重さが嫌でも思い出される。

女人の声が複数きこえていた。音がぼやけていて、なんと言つてゐるかはわからない。おそらく助産婦か誰かの声だらう。

自分の全身が体液でぬめつてゐるのがわかつた。寒い。強い血の臭いがしてゐた。不快だつた。どうにか動こうとしたが思うようにいかず、手足をバタつかせることどまる。

目は開いていない。開けたくもなかつた。光は怖い。この世の形を、残酷な色を、否応なく突きつけてくるから。

喉は全力で泣き声をあげていた。鳴き声をあげる獸のように。

そうして初めて、気がつく。理解する。

自分がどうして泣きたいのかを。どうして、泣き叫んでいるのかを。

それはとても簡単で、シンプルな答えだった。

。

生まれたく、なかつたから。

わたしは生まれるべきじゃなかつたって、世界に向けて訴えたかったからだ。

きつとすべての赤ん坊も一緒。

だから皆、泣きながら生まれてくる。

生まれてきたくなんかなかつたって。どうして、わたしを産んでしまったのって。

血と祝福にまみれながら、懸命に、あらん限りの声で。涙と呪詛を撒き散らして、誰にも届かない嘆きを叫びこめているんだ。

たとえ、どれだけターンを重ねても。

生まれてしまつたび、わたしは、またいつも叫び続けるだろう。

何度も。

何回でも。

2 - 8 (後書き)

2章終了です。

すべては、既に起つてしまつた。

魂と同じように、もう変わらない、もう変えることのできない過去。

記憶は分断され、ばらばらにされて意味を喪失し、使えないデータの藻屑となつた。

だが今も、リカバリーされる可能性を秘め、役立たずの欠片は存在し続けている。

復元されるべきなのか否か、その是非は別として。

花壇に囲まれた中庭。背筋を伸ばし、男は片膝をついてひざまずいていた。

田の前に、白い衣を着た美しい金髪の女性が立つてゐる。半身を男へと向け、青い瞳から涙を流してゐた。

「ジャック……もう止めませんか？ 罪人を、斬りにいくのは」

「なりません。それが役目ですか？」

芝生に置かれた刀を、ジャックと呼ばれた男の右手が握つてゐる。

「私には見えます。あなたの魂の形……今は、とても歪んでいます。とても軋んでいます。悲鳴がきこえます。なのにあなたは強く、気丈にふるまつてゐる。本当は、全然平氣なんかじゃないせに」

女性は強い口調で言い、涙と鼻水をこすつた。感情的になつてゐるのか、子供っぽさを垣間みせながらも言葉を続ける。

「斬りたくなどないのでしょう？ もういいのです。この都市のために、あなたが犠牲になんかならなくとも。私達一人に、いつまでも仕えてくれなくとも」

「……泣かないでください。人の上に立つ者は、そんな簡単に泣いてはなりません」

ジャックの口が優しい口調を紡ぎ出していた。この女性には泣いてほしくなかつた。その涙を、悲しみを少しでも取り除いてやりたかつた。

だからこそ、自分はここにいるのだ。

この人に泣いてほしくなかつたから、この人と、この人の夫に仕えているのだ。

そうしたジャックの意志を汲み取ったのか、女性は笑顔を作ろうと努力していた。透き通つた白い頬へと赤みがさす。人形めいた美貌へと生気が加わり、女性の横顔をより一層魅力的にした。

そんな女性へと見入つてしまつていたのにハッと気づき、ジャックは深く頭を垂れた。恥じる表情を隠しながら、努めて平静な声を出す。

「それに、仕えてくれなくともいいだなんて、もう一度と言わないで下さい。私は私の意志で、我が主と、お妃様のそばにいるのですから」

ジャックが確信をもつて言つと、女性の笑顔は瞬く間に崩れ、再び悲しみの色を宿した。

「その『意志』を、変えることはできませんか？」

「？ どういう意味でしょう」

「あなたの忠誠には感謝しています。それこそ感謝しきれないとくらいに……”ですから”、”だからこそ”、その意志を変えてもらいたいのです。あなたは傷ついている。なのに意志を変えようとはしない。私には……それが悲しくてならないのです」

「おっしゃっている意味が、よくわかりません」

ジャックは懸命に頭を回転させたが、やはり女性の言葉には理解が追いつかなかつた。

虚しさが、胸に広がる。

「いつだつてそうだ。

「この人の涙を止めたいと思うのに、この人が何故泣いているかさえ、自分には理解できない。

「あなたは、あなたの忠誠心に囚われている」

女性が謎めいた話を続けた。

「その呪縛がいつか解ける希望を、私は今まで持ち続けてきました。けれどだめだつた。やはり夫の言い分が正しかつたのかもしません。私は、間違つていたのかもしません」

両手で顔を覆う女性を見上げ、ジャックは立ち上がつた。必死に。縋りつくように。

「わかりません、もっと詳しく教えてください！ 私は、何をすればいいのですか？ それさえわかれれば、どんなことであつても、必ずやり遂げてみせます！」

「もう、いいのです……」

話は終わりとばかりに、女性は白き衣をひるがえし、その場から立ち去つていいく。

ジャックは女性の後を追おうとした。しかし足が動かなかつた。見限られた気がしていたのだ。

もういいと。お前は無力だ、お前には何も期待できないと。

そんな絶望にしつぶされた女性は、女性の背を向けていたまま、女性は言い残した。

『『一ターン目のアートマ』は、くつがえせないのですね。ならばもつ、私達は、私達の社会は、あなたに頼るしかないのでしょうか。あなたの力……あなたの、ハニルヴァーナくに』

女性の姿が消えた後もずっと、ジャックは立ちはだかっていた。その右手にはまだ、刀の鞘が握られている。強く、握られていた。

ジャックに残されたのは、もはや、その力しかなかつたから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2361y/>

---

一ターン目のアートマ

2011年11月27日20時47分発行